
吸血鬼にも愛は必要？(仮)

U16

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼にも愛は必要？（仮）

【Nコード】

N1259Y

【作者名】

U16

【あらすじ】

西暦2100年。世界は緩やかな停滞期を迎えていたが、20世紀から大きく変わった事は吸血鬼という存在が世界中で認められた事だった。そんな中、新たな吸血鬼が極東の島国である日本で生まれた……

第01話 新世紀を迎えて……（前書き）

この小説は筆者の自己満足小説です。

予告なく文章が変更、改訂される恐れがあります。

ご注意下さい。

第01話 新世紀を迎えて……

恐らく彼は、自分の30年に満たない人生の中で、最も驚きに満ちた顔をしていたのではないだろうか。

美女。美人。綺麗。

学校に通っていた時も文系ではなかった彼の頭の中には語彙が少なく、その3つの単語しか出てこなかった。

彼は、こんなにも印象的な女性を見たのは、初めてだった。

西暦2100年を迎えてからまだ2日目。

テレビをつければトップモデルや女優、ネットアイドル等これでもか、というくらいに整った顔立ちや扇情的なボディラインの女性を見る事ができる。そんな現代では、彼女程度の顔立ちの美人はいくらでもいるだろう。

はつきり言ってしまうえば、ありふれている。少なくとも彼の偶像アイドルオタク愛好家な友人は、そう評価するだろう。

先進国 経済的富裕国。そう呼ばれる国々の医学は革新的な発達こそしなかったが、個人登録パーソナル登録とDNAレベルでの病気の予防を兼ねた健康診断。この二つを小学校に入学する前の子供が済ませるのが当たり前になり、成人するまでの病気での死亡率は、ほぼ「0」になった。それと同時に流行したのがDNA形成型整形手術だった。個人登録パーソナル登録と同時にDNA形成型整形手術を受け、成人するあたりで美男美女になれるように、DNAをいじるのが当たり前間の世の中である。

そんな早期美容整形が当たり前流行になったせいもあり、世の中はよ

り本質重視になった。

第一線で活躍する人材は、顔は良くて当たり前。スポーツ選手であれば運動神経や力よりも技術、芸人なら面白さ、役者は演技力、歌手は歌唱力、モデルであれば完璧に維持されたスタイルを駆使した無言の表現力、そういつたDNAの書き換えでは得られないモノが重視された。主義主張のぶれるコメンテーターなど過去の遺物でしかなかったし、テレビからも見た目だけの中身の無いものは排除された。

人は日々の努力が無くては得られない部分が評価され、物であればその本質的な価値以外、全く評価されない時代が半世紀も前から続いている。

そんな訳で彼からすれば、見慣れた程度である筈の女性から西暦1980年代生まれの曾祖父の影響で『でも20世紀あたりなら、間違いなくトップモデルだっただろうなあ』等と頭の片隅では考えていたが 何故か目が離せなくなった。

灰色つばい髪。同色の瞳。

もしかしたら昼間見れば銀色なのかもしれない髪と眼が、彼の心を驚掴みにしている。彼は身動きが取れなかった。

彼女は温暖化のせいで、冬なのに本気でコートを着込む人も少なくなってしまうた日本には珍しい、厚手の純白のコートを肩に羽織っている。

そのコートの合間から見えている服は紺一色のロングのワンピース。柄や模様が特に無く、体のラインが出る様にデザインされているせいで、スタイルが良いという事ははっきりとわかった。そして、そんな服は日本では一般的ではなく、超の付く高級品である事は彼の乏しい知識でも認識できていた。

服装もそうなのだが、日本人ではなかなか見かける事のない腰の
高さが目を引く。不健康に見えない程度に透き通るような白い肌と
相まって、外国人なのだろうと考えていた。

彼は、そんな彼女をじつと見つめて観察していた事に対し『失礼
だよな』と思いつける。謝罪しよう。会話したかっただけかもしれない
ない。として、外国人なら言葉が通じないかもしれないと気付く。
急いで携帯を取り出そうとしたが、携帯電話の10ヶ国語翻訳機
能を使おうと思いついたのだ。彼女から目が離せないまま、何処
に入れたのか分からない携帯電話を探し、手探りで服のあちこちの
ポケットを漁る。

「……………やつと外に出て来た……………遅すぎです……………」
焦らなくても良いですよ。逃げたりしませんが。」
「え？ あ、すまない。ジロジロ見て申し訳ない。日本語が通じて
良かった」

彼女もまた、俺を見つめたままできてくれた
……………いや、違う。言葉が通じて良かった……………
でも何故だろう。彼女の表情は、家で飼っていた猫がよくやって
いた表情に似ている気がする。

拗ねた様な 喜びを隠しながらも、怒っていますという感情を
出そうとして出し切れていない表情 『もう二度と目を離しませ
んよ』そういう眼差しで見ている。と、彼は何故かそう思った。

彼は寝正月を満喫する為、たまたま無くなりそうな煙草と酒を補
給する目的で、嫌々ながら家から出てきて彼女に出会った。

大晦日の終わりまで続いた仕事からやっと解放され、家に辿り着
いたと思った瞬間に曾祖父を含む、家族全員に強制的に近場の神社
へと初詣に連行された。

近場の神社で たしか学業と雷の神様を祭っていたはずで、
学生でもない俺には意味が無いんじゃないか？」という彼の意見は、
家族一同に却下された 年越しと初詣を済ませて家に戻ってから
は、一歩も外に出ていなかった。

正月だし、商店街から少し離れたコンビニエンスストアぐらいし
か開いていない。どうせ車も走っていないのだ。歩道橋を上げら
ず道路を渡るうとして、歩道橋の下にいた彼女から目が離せなくな
った。

目が合った瞬間から、本当に一度も目を逸らしていない。瞬きす
らしていないんじゃないかと、彼自身がそう思うほど見つめていた。
彼女の言動をもっと見たい。彼女について知りたい事が溢れてく
る。それにも関わらず、彼の体は何も行動を起さなかった。じつと
見つめ、彼女の出方を待つことしかできない自分はヘタレだと、彼
は心の中で凹んでいた。

彼女の視線や表情は、先程からの彼の予想通りの意味を持ってい
た。が、それに加えて少しどころか120度位、方向性の外れた事
を 具体的には、此处で会ったが百年目。如何にして今迄の鬱憤
をぶつけて困らせてやろうか。という様な少々物騒な事を 彼女
は考えていた。

もちろん。彼にはそれは解らなかったし、彼女は現段階の彼が解
っていないくても困らなかったし、仕方のない事だと理解していた。

故に彼女は思惑通り、普段とは違う可愛らしい仕草で話しかけた。

「携帯電話はもう出さなくていいの？」

「え。あ、いや。もし外国の人なら翻訳機があるかな、と思っただ

「けで……」

「連絡先を聞きたかった。とかではなく？」

「あ、いや。教えてくれるなら聞きたいけど……って、ちがう！ナンパじゃないんだ！」

「あら、そうなの。ナンパなのかと少しは期待したんですけど……」

そう言って彼女はお上品に口元に手を当ててクスリ、と笑った。

その瞬間、彼は自身でもはつきり分かるぐらいに顔が熱くなった。

あー、やべ。今マジで真っ赤になってるわ。マジかよ。今幾つだか言ってみろ俺！ 28歳、四捨五入すりゃ30だぞ！？ 色々経験も積んだだろうが！？

彼は何故そうなるのか訳が分からなかったし、その思考を始めすべての事が彼にとって、もはや意味不明だった。からかうように話しかけてくる彼女の意図も、自分のヘタレっぷりも。

何故、彼女の態度から勝手に意思を読みとったつもりになったり、彼女の行動に好意を期待したりしているのか。

彼は少なくとも恋人どころか、妻すら居た事のある身である。妻とは一年前に離婚し、それ以降どんな女性にも普通の友人曰く、醒めた 対応だけはできる様になったはずだった。なのに、何故こんなに焦っているのだろうか。彼の頭の中は整理するどころか、幼稚園児の書いた題名のない絵の様にぐちゃぐちゃで訳が解らなかった。

「今の今まで半信半疑……いえ、信じてはいたのだけれど、からかわれている可能性を捨て切れなかったのよね。でも、本当にあなたの反応は私にそっくりね。初めて私を見つけた時のアナタの気持ち少しだけ分かったわ」

「え？ あれ？ 初めまして、だよな？」

「ええ。あなたとは初めまして、よね。それとも『どこかで私を見かけて、ずっと追いかけてました』なんてストーリーカーマがいの事でもしてくれたのかしら？」

「してねえよ！ いや、そんな顔するな！ マジでしてねえよ、そんな事！」

明らかに、からかっています。という様な言い方の彼女に聞くべき事は分かっているはずなのに、全く話が進められない彼は感情をぶちまけた。

「訳わつかんねえよ！ あーくそ！ とにかく！」

俺は『彼方かなた 吉朗いちろう』だ！ 覚えておいてくれるとありがたい、つか嬉しい！」

「あら。自己紹介をしてくれたのは嬉しいのだけど、私は今は名乗る訳にはいかないの。ごめんなさい。」

そうね。呼ぶなら、『レイ』と呼んでくれる？」

「ああ。なんか訳ありなのか？」

「そうなの。でもあなたには、近々名乗る事になると思うわ。あなたの事を『吉朗』そう呼んでいいかしら？」

「ああ。構わない」

吉朗は彼女の名前が、別に偽名でも何でも構わなかった。彼女との会話もおかしい部分があつたが気にならなかつた。話せただけで舞い上がっていたし、彼女の言う『初めて私を見つけた時のアナタ』も吉朗の事ではなく『アナタ』という名の誰か』だと、すぐにそう認識した。

なぜなら、吉朗は変な名前については慣れていたからだ。吉朗の『彼方』という名字も曾祖父の代からの物で、アナグラムであり、文字列逆順

元の名字は『田中』だった。曾祖父の両親が事故で亡くなり、天涯孤独となった後で『どうせ名乗るのは自分一人なのだから、カツコよくしよう!』と名字を変えたらしい。曾祖父本人曰く、『黒歴史』だそうだ。

この吉朗の曾祖父の『黒歴史』が無ければ、吉朗の名前は『田中吉朗』などという、山田太郎や下手をすれば『記入方法の見本』鈴木一郎の様な名前になるはずだった。

そんな『黒歴史』のお陰で『記入方法の見本』となる事は避けられた吉朗だったが、同時に嬉しくない『黒歴史』をも刻んだ。

高校に入学し、2ヶ月ほど経った頃だった。一つ年上の先輩が『どうせならスズキやサトウなんて珍しくもない名前じゃ嫌よね。…』という訳で彼方クン、私と付き合ってくれない? 結婚したら私は「佐藤」理沙から、「彼方」理沙になるのよね。可愛くない?』という訳のわからない理由の告白に、吉朗は『マジ可愛い。芸能人にいそうな名前だ』等と言って即OKした。高校一年にして、初めて彼女ができた事に有頂天になった。

当時から偶像愛好家な友人と共に居たせいもあり、中学ではモテる事のなかった吉朗は、邪魔しようと躍起になる友人達 自称オタクな親友 を排除し、高校一年の冬には初体験も済ませる事ができた。

そして、人生を謳歌していたはずの高校二年の秋に、リユウキ・リヴィングストーンというハーフの転校生が突如現れ、 転校生が来るのが突如なのは当たり前だったが 残念な事にその転校生に彼女を寝取られたせいで、彼女との交際は吉朗にとって思い出したくない『黒歴史』となった…

などと自身の過去を思い出し、初体験の記憶顔が綻んだり凹んだりしている吉朗を見かねたのか『レイ』と名乗る女性が気を使って声をかけてく

れる。

「あの、名前言えなくてごめんね？ そんなにショックだった？
もしかして姓名判断愛好家？」

「あーいや、そうじゃないんだ。『彼方』って苗字と姓名判断愛好家には良い思い出が無いというか。うん。それを思い出して凹んでただけだから」

レイの言う姓名判断愛好家とは、19世紀に流行^{はや}った姓名の字画から運氣や将来性を判断する物などではなく 吉朗の初めての恋人の様な『どうせ世の中は美男美女ばかりなんだし、付き合^{最悪結婚する}うなら良い名前の恋人の方がいい』という考え方の人種の事だ。

実力主義の風潮が強い日本では、吉朗も含まれてしまうのだが 成績的に底辺に近い高校や大学出身者には、こういう男女が多くいた。何しろ実力が底辺なのだ。親の資産か名前以外はみんな似たり寄ったりだからである。

だからこそ、と良い名前の恋人を望む男女は姓名判断愛好家などと言われていた。実力主義の風潮が強い日本で親の資産などを気にしていると『金の亡者』などと言われイメージが悪すぎる為、自然と姓名判断愛好家が多くなってしまっているのが現状だ。

「そ、そう？ 最後の方はかなりの哀愁を背負ってるように見えただけけど……」

「大丈夫。大丈夫。……… ちょっと振られた事思い出して凹んだだけだから……」

その瞬間。

吉朗はレイに両肩を鷲掴みにされ、歩道橋を支える柱に背中を押

しつけられて睨まれていた。

「い、ま、な、ん、て、言、い、ま、し、た、か？」

「え？ え？ 『思い出して凹んでただけだから』？」

「その前です！」

「ひつ。『大丈夫、大丈夫』」

『俺の状況は全く大丈夫じゃなくなっただけど』とは、吉朗は口が裂けても言えそうにはなかったが。

「その後です！！」

「ちよつと振られた事を思い出して…… 『そこ！』……え？」

「誰に振られたんです？」

「え、いや……」

吉朗はあせりながらも頭を必死に働かせようとした。あれ、なんか彼女の口調変わってる？ これはあれだよな、ナンパまがいの事をしておきながら他の女の事を考えてたのを怒ってるって事だよな？ やばい、謝らないと。とにかく機嫌を直してもらわないと。でもさつきまでの反応と、これだけ怒るって事はそれなりに俺の事を気にかけてくれてるって事だよな？ 上手くいけば一年ぶりに彼女ができるかもしれないかな？ が、考えている事は現状の把握と無駄な妄想だけで、何一つ解決策が出てきていない事には気付いていない。

そこに追い打ちをかけるように、低く、唸る様に地獄の底から響いてきたかの様な声でレイが囁く。

「誰に振られたのですか？」

「い、いや、もう10年以上前の事だしさ」

「そんな事は、聞いておりません」

「え、あ、はい。解りました。話します……」

怖い。怖すぎる。そんな脳内警告を受け何故か丁寧に対応してしまふ壱朗。

初詣帰りだろう、通り過ぎる家族連れや恋人同士カップルの通行人達の中にはヘタレな男の浮気が彼女にばれて、問い詰められているようにしか見えなかつただろう。

しかし、壱朗の側からするとそこまでされなければいけない理由は解らない。ナンパだと思っっているなら、彼を置いてこの場から立ち去ればいいはずだ。無理に追いかける度胸など、ヘタレな壱朗は持ち合わせていない。

壱朗には全く解らないし、理不尽だと思っただが、彼女の表情が『もちろん答えてくれますよね？ ええ。拷問してでも聞き出しますよ？』と言っている。『自称、及び他称：ヘタレ壱朗』には何故か、逆らつてはいけないという神の声が聞こえている様で、大人しく答える事にした様だ。

「えっと、高校一年性の時の初めてできた彼女が……」

壱朗は答えながら、『そうだ。こんなに気になる彼女に出会えたのも、きつと昨日行つた神社の神様のお陰だ。だからこの神様の声には従つておく方が良い……はずだ』と、自分を納得させていた。

………。学業と雷の神様としてはかなり評判のいい神社が、縁結びにも御利益があるなどという話は地元の人間ですら聞いた事が無かつたし、壱朗は近所の商店街でも有名になつてゐるヘタレだという事実。この二点には精神衛生上の都合により、大いに目を瞑つておく事にしたらしい………。

第01話 新世紀を迎えて……（後書き）

感想やアドバイスを頂いてもお返事出来なかったり、文章に反映出来なかつたりします。それでも私は感想を書いてやるうじやないか！という方のみ感想をください。一年ほど色々な小説を読んだあげくとにかく妄想から生まれた文章です。設定や話の内容で類似のものがある場合はこっそりと教えて頂けるとありがたいです。盗作と呼ばれる様な類似性がある場合はこちらが削除、または改訂します。（内容はともかく時期的にこちらが先の場合は検討します…）

第02話 吸血鬼が生まれた日（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第02話 吸血鬼が生まれた日

レイの態度が豹変した後、二人は歩道橋の下に積み上げられた工事用の資材の上に座り、結構な時間話し込んでいた。いつの間にか手渡された缶コーヒーを片手に、過去に付き合った3人の女性と妻であった女性との成れ染めから顛末迄を、原稿用紙20枚程度の文章で説明させられたあげく、その後数時間に渡ってどんなプレゼントを贈ったか等、詳細を暴露させられた。

家を出た時は暗くなり始めたばかりだった筈の景色も、今では既に真っ暗になった。生れてからずっとこの街に住んでいる壱朗は、全く人通りが無くなった事や周辺の雰囲気から、もうすぐ日付が変わるのだから事を予測していた。

「大体の所は理解致しました。あまり時間ありませんので、このぐらいに致しましょう」

「ソウデスカ。御静聴アリガトウゴザイマシタ」

レイが白銀の煙管キセルを持った手を膝の上から持ち上げ、腕に着けた高級そうな時計を確認した後、煙管キセルに刻み煙草を詰める作業を始めたのを、俺はじっと見つめる。

話の合間に壱朗が煙草を吸い始めた時に、彼女も白銀の煙管キセルを何処に持っていたのか 鞆から取り出し、足を組んで煙草を吸いだした。俺は女性が喫煙するのはあまり好まなかったが「アナタと一緒に時はたまに吸っていたんです」と過去形で言ったレイの表情のは、愁いを帯びたものに変化していた為、ヘタレな俺はそれ以上は何も聞けなかったし、何も言えなかった。

別に足が綺麗過ぎて白銀の煙管キセルを見る振りをして、綺麗な足に見惚れていたから、何も言えなかった訳ではない。少なくとも今はそうじゃないぞ、と吉朗は心の中で、誰かに必死に言い訳をしていた。その時

「吸いますか？」

そう言って差し出された、年代を感じさせる白銀の煙管キセルからは俺好みのメンソール系の煙草の匂いがしていた。

差し出されたままの煙管キセルを見て、というよりも「吸いますか？」と問いかけたレイの言葉と態度が、とても妖艶な大人の女を感じさせるものになっていたせいで「関節キスになるな」と青少年のような反応をしてしまい「自分の煙草がある」と、煙草を出して断ろうと懐に手を入れたが、懐には煙草は無かった。

足元を見ると、無残に散らばった煙草の吸殻が十数本。話をしているうちに、懐にあった煙草は吸いきってしまった様だ。

俺は現状を理解し、覚悟を決めて吸わせてもらう事にした。

いや、覚悟が必要なのかと問わないで欲しい。目の前の女性レイは最初話しかけてくれた時は、二十代前半らしい可愛い仕草だった筈なのだが、今では夜のお仕事のお姉さんよりも色気のある仕草で、こちらを誘惑しているのだ。

おかげでこっちは、今までの女性経験も全部吹っ飛んで青少年ガキみたいな反応をしている有様だ。覚悟ぐらい必要だろう。

などと、誰に話しかけ言い訳しているのかは知らないが、吉朗の頭の中は混乱しているようだった。もちろん、レイが今の吉朗の頭の中を覗けたなら、誘惑なんてしてないと否定するのは間違いないだろう。だが、少なくとも吉朗はそう感じていたのである

「幸い、煙管キセルは曾爺さんの物を吸わせてもらった事があり、『下手な吸い方をして恥をかく事もないだろう』と、俺は手を伸ばした。」

「悪いな、自分の煙草は吸いきつちまったみたいだ」

煙管キセルを受け取り吸ってみると、曾爺さんの物とは何かが違う。メソールの刻み煙草も珍しいが、何故か終わりが無い。普通は3回程しか吸えないモノだ。それに、今の自分の様に粋な吸い方に見せようとして、5回も吸ってれば灰が入って来てもおかしくないのだが、と覚悟が必要だった割には、余裕を持って平然と吸っている……

「……関節キスですね……」

「ブホッ!!」

今、明らかに吸いこんだ瞬間を狙って言っただろうレイの声に、咳き込んでいる吉朗は目で苦情を訴える。そんな吉朗に、百人いれば百人が見惚れる様な微笑みを浮かべながら、レイが話しかける。残念ながら、レイの笑顔を堪能する余裕は今の吉朗にはなかったが。

「……煙管キセルは落とさないで下さいね。貴方キセルから貰った大事な物です。私は初めて吸った時には煙管の吸い方なんて知らなくて、何度も吸ってむせてしまつて。不思議でしょう？ これは特別な作りの煙管でして、10回くらいは吸えるんです」

そう言いながら吉朗の手から白銀の煙管を取り上げたレイは、微笑みながら躊躇いもせず口に持っていき、残りの数回吸うと煙管を片付け始める。

「初めて、煙管の吸い方を教えてくれた時の貴方は数回しか吸えない事をわざと黙っていて、私は吃驚させられたんですよ?」

「俺は曾爺さんが煙管派だから、吸い方くらい知ってたよ……」

咳き込んだせいか、目尻に涙を溜めながらも吉朗は言葉を返し、手に持った空き缶の中に足元に散らばる煙草の吸殻を詰めはじめ。元々、吉朗は吸殻を道端に捨てる様な人種ではない。レイとの会話に集中しすぎて、気が回らなかつただけだった。

「ええ、だから詰まらないので、吃驚させたくって……これでお相子ですね」

「っていうか『アナタ』って人に騙されたからって、俺にこんな悪戯するなよ。俺を吃驚させてもお相子にはならないだろう。」

……それよりも、大事な物なら俺なんかには吸わせてよかつたのか? 「構いません。貴方も怒らないでしょうし」

不思議な部分の多々あるレイの言動だが、吉朗はそれに対して何故か嫌悪も疑問も感じなかった。レイがたまに見せる、どこか会話を懐かしんでいる様な表情は吉朗の頭の中をその度に真っ白にし、他の事がどうでもいいと思える程印象的だった。恐らく今、会話はできていても『明日には何を話したかなんて覚えて無いだろうな』と吉朗は思っていたし、何もなければ本当にそうになっていただろう。

「そう、か。……ならいいけどな」

「そろそろ時間の様です。きちんと説明しなければいけませんね」

名残惜しいが、煙管を片付け始めたあたりで、時間がそう残っていない事は気付いていた。吉朗は認めたくはなかったが。しかし、遅くまで話込んだせいで、家族に説明でも必要になるのだろうか。やはり育ちの良いお嬢様なのか？ もしかして、家族との約束を破らせたりしていけない方がいいが。などと吉朗は考え、謝ろうとした。

「あ、そか。帰るよな。ごめんな。変な場所に長居させて」
「いえ。そうではありません」
「え？ それは……『PULLLLLLLLLL』……ん、電話か」

着信を見ると、父親からだった。吉朗がレイを見ると、『どうぞと身振りで勧めてくれたので、片手で詫びて電話に出た。そして吉朗は、携帯電話を耳にあてたまま凍りついた。

「嘘だろ？ 親父、曾爺さん今朝まで思いっきり走ってたじゃねえかよー！」
「……吸血鬼……そうかあの化け物どもが……」
「ふざけやがって、曾爺さんが何したってんだ！」
「ああ、とにかく今すぐ戻る。待っててくれ」

吉朗の父親からの電話の内容は曾祖父の訃報だった。彼の曾祖父は120歳などという妖怪じみた年齢でありながら、化学の進歩と医療の発達のお陰で痴呆症を発症する事もなく毎朝元気にジョギングしていた。

流石に120歳という年齢は現段階では人間の世界基準で見ても最も高齢な部類の人でもあったし、あと10年生きるのは無理だと医者からも言われていた。

だがそれでも、今日いきなり死ぬはずもなかった。曾祖父は医療

用マイクロマシンの投与も受け入れていたし、何より今晚は耆朗の友人の偶像オタクと1990年代のグラビアアイドルについて語り明かす約束をしていた筈だ。

曾祖父は約束を破った事が無い事が自慢で町内では有名人だったし、耆朗はそんな曾祖父が好きで、その影響も多分に受けていた。

耆朗は携帯電話をポケットにしまい、何度も深呼吸をしてみる。

落ち着こうとしているが上手くいかなかった。体がまるで耆朗のモノではない様に感じていた。耆朗の意思に反して小刻みに震え続ける体が、それを明確に物語っていた。

吸血鬼。裏付けや確証のある記録に残っている分では、西暦2000年あたりから世界中で認知されだした存在だと言われている。その存在の情報が一般人にも公表されたのは、2050年頃の事だった。きっかけは、中南米のある大統領が退任演説中に自分が吸血鬼だと表明し、その場で自分の首を完全に切り離して見せた。もちろんそのままでは生活できるはずもなく、すぐに元通りにしており、一時はCGや特撮ではないのかという議論が持ち上がったそうだった。その後、世界中の先進国が自分の国にいる吸血鬼について一般人に公表した事もあり、認知された存在となった。

2000年あたりから、大きく進歩することなく行き詰っていた医療技術は、吸血鬼等の存在の恩恵により緩やかにではあるが発達した

その事件から50年が経っている。

耆朗の生まれた時には既に当たり前の存在だったし、曾祖父がその恩恵である医学の進歩のお陰で、毎朝元気に走っている事もあり、比較的受け入れている側の人種だと耆朗自身は思っていた。が、やはり身内が被害にあうと『化け物』と言ってしまふ事からも、心の

どこかでは人間ではない人外の存在達を区別して見ていたのだろうと自覚した。

吉朗の心は落ち着き始めていた。しかし、体の震えが一向に収まる気配が無い。訳が分からなかった。『今すぐに帰って、詳しい事情を知りたい。友人にも知らせないといけない』と、思っているのに体が動かない。

レイは気付いていた。

彼女は吉朗の身に何が起こっているのかを正確に知っていた

「吉朗様、落ちいて下さい。私が、貴方様の傍にいますから」

「レイ？ 何を言ってるんだ？ 俺は落ち着いているだろう？」

「手を見て下さい。こんなに震えています。これでも落ち着いていると？」

「あれ？ 何だ？ おかしいじゃないか、体が言う事をきかない」

「吉朗様。失礼致します」

レイは羽織っていたコートを傍に置き、正面から吉朗に抱き付いた。

そして、吉朗の耳に口を寄せ、促す様に囁く。

「私を乱暴にして頂いても構いません。強く、強く、自分が生きていると実感して下さい。吉朗様の心は生きる事を望んでいるはずで、体の変化を心で受け入れてあげて下さい……………吸血鬼として生きる為に」

「づううううつつ……………がああああつつ！」

吉朗の心にはレイの言葉は届いていなかったが、彼女は吉朗がどのようにしても許される存在だという事だけは本能で理解していた。

吉朗の腕は意思とは関係なく、レイの服を破ろうとする。しかし破けない。

普通に考えれば、ただの人間に服など簡単に破れる訳はない。

しかし、既に吉朗は人間ではなくなり初めている。

簡単に破ることのできる程の力がかかっていた。それ以上にレイを傷つけまいとする吉朗の意思の力か、吉朗からレイを引きはがそうとする力は尋常なモノではなかった。

「吉朗様。お気づかいは無用です。御自分の為だけに力をお振るい下さい。傷つけて頂いてもすぐに治ります」

その言葉が引き金になったのか、吉朗はそのままレイを抱き締めると、その体を細切れにしようとしているかの様に、引っ張り、掻き毟り、暴れた

第03話 過去への旅立ち（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第03話 過去への旅立ち

吉朗が暴れ始めてから二時間が経過し、やっと吉朗の体は落ち着きを取り戻した。腕はレイの体を抱きしめたまま、全く離そうとしなかったが。

「吉朗様。もう落ち着かれましたでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。ほんとうに、すまない」

吉朗は知ってしまったからこそ、無意識に『嘘』をついた。

吉朗は理解していた。

自分が一体何になったのかを。

そして同時に何故、自称『レイ』にそこまで心惹かれたのかも理解した。

目の前にいる自称『レイ』も同じ、いや、似た様な存在なのだと理解していた。

吉朗は頭の中を何とか整理しようとしていた。

曾祖父が殺された。家で吉朗の友人との約束があったはずの曾祖父が、外に出て吸血鬼に殺された。曾祖父にとってはいつも通りの行動だった。財布を忘れた時も届けてくれた事があった。走って追いかけて、忘れ物を届ける。そういう役目は曾祖父の役目だと家族みんなが思っていた。役目がある事は曾祖父が痴呆症を発症させない事にも繋がる。そんな風に話し合った事すらあった。しかしその役

目のせいで曾祖父は死んだ。吸血鬼が許せなかった。それ以上に吉朗自身を許せなかった。曾祖父が外に出たのは吉朗を追いかける為だったと父親が言った。『どうせ隠してもすぐに気づくだろう』と教えてくれた。

吉朗おれは今何をしていた？

吉朗おれは女性レイと話をしていた。

吉朗おれは曾祖父が襲われていた時に。

吉朗おれは女性レイと話す事に夢中になっていた。

やり直したい。

やり直したい。

やり直したい。

吉朗おれが吸血鬼になってしまったのは自分の罪の意識からだったのか？

吉朗おれのせいで曾祖父を死なせた罰だったのか？

吉朗おれが吸血鬼？ 女性レイもそうなのか？

やり直したい。

やり直したい。

吉朗おれは人間おれも吸血鬼おれも許せない

やり直したい。

『「過去に戻ってやり直したい」』

そうして『真祖』 彼方 吉朗』は生まれた

落ち着いた。そう判断したのだろう。自称『レイ』はそのま^{抱き合ってたまま}まの体勢で話しかけてきた。

「話をしても、よろしいでしょうか？」

「いや、家に帰らないと。曾爺さんの事があるんだ」

自称『レイ』も同じような存在だと気付いて、少し嫌悪していた。嫌悪を感じ取ったのだろう。少し悲しそうな声色で話を続けようとする。

俺を抱きしめた手を、自称『レイ』は離す事なく続けた。

「その曾祖父様の事についてですが」

「……………」

「曾祖父様を襲ったという吸血鬼^{クソ}の、名前も、血族も、血統技能^{アビリティ}も、居場所も、何もかも調べられますし、お教えできます」

「……………」

「貴方様のお望み通りに致します。如何致しましょうか」

俺は十分程考えた後、はっきり言った。

「仇が取りたい。俺ができないのなら、できる誰かに依頼したい。そう言ったら可能かな？」

俺は答えは分かっていたが、一応聞いてみる形は取った。

「貴方^{キミ}様の手で果たせますし、果たすべきです。その為に最初の四千年を費やした。そう聞いております」

俺は自分が何になつたかを理解した筈だ。何を手に入れ、何を失つたのか。ガキの頃、ヒーローを夢見た事もある。だけど、俺には無理だと心のどっかで思つてた。でも今は違う、俺には力があり、何ができるかが分かつてる

『血』が教えてくれる。

俺の血統技能は『時間跳躍』だと。

「やっぱりそうしたんだな。俺は」

「はい。ただ、初めて跳んだ時は血統技能に気付いていたかどうかまでは覚えていないので、気付いた場合にだけ言つて欲しいという伝言を預かつております。『聞くかどうかは俺に判断を委ねろ』と言われております」

俺が人間だつた先程までとは打つて違って、自称『レイ』の対応は実に丁寧だつた。丁寧だつたが焦っているのか、無理をしているのが分かつた。

「何か急いだ方が良い理由があるのか？」

「はい。今の貴方様は、生りたての力の安定しない真祖です。その状態の真祖は二世、三世の吸血鬼にとっては力を上げる、極上の餌となりますので」

「レイは一緒に行くのか？」

「いえ、貴方様お一人で行つて頂く事になります」

老朗は今の状況とこれからの事を少し考えて、結論を出す。

「伝言、……聞いておくか。その様子じゃ、レイに会えるまでに結構な時間がかかりそうだ。声も覚えておきたいしな」

「つつ！……では。」

タイム・パラドックス
世界の修正力との衝突を避ける為、あまり情報は持たずに行くのが望ましい。

一つ目。調べるのは血の力と時間の関係。睡眠中もそれは起こるのか。

二つ目。同じ存在を二人存在させると、何が起こるのか。

三つ目。人として研鑽を積む事は出来るのか。

我は曾祖父の仇を筆頭に、命を無意味に弄ぶ吸血鬼をすべて排除する

……以上です」

「大それたことを言うもんだな」

「それが許される、世界でたった一人のお方です」

「そうか。それじゃあ、すぐにでも行くか。」

それより、なんだか分からないが言いたい事は我慢せずに言っていないぞ？」

「はい………すみません。後の負担になるかもしれませんが、我が儘をお許し頂けますでしょうか」

恐らく、自称『レイ』は吉朗の眷族なのだろうと気がついていたが、どういう扱いをしてきたのかさっぱり分からない吉朗は『とりあえず自由な方がよいな』と結論付けていた。

「……いよいよ」

すると、自称『レイ』はガバツと体を離し、吉朗の前に跪く。そして、吉朗の『左手』を取り、額に当てた後に薬指に歯を立て『血』を吸い出す。

「痛ッ……」

吸い出した後、動物が傷口を舐めるように優しく舌が這わされた。結構な痛みを感じたのだが、すぐに治ったようで左手の薬指には傷すら残っていなかった。我が儘を許すと言った以上、何も言えず我慢していた壱朗に自称『レイ』が声をかけた。

「わ、わたくし、レティシア・フェルナリーゼは、この身が滅ぶ、その瞬間まで、貴方にお仕え致します。………っっ！」

きつと、求婚に近い意味を持つ儀式なんだな。耳の先まで真っ赤だもんな。ずっとこんななら可愛いのかなあ。詰問されてる時はほんと怖かったし。いやでも、だからこそ傍に置いたんだろうな

などと自称『レイ』いや、ティアの額に触れた左手を動かして、壱朗は頭を撫でながら考える。

「あの……聞こえていると解っておられて、やっていますよね……」
「……うん。なんとなく。血が教えてくれた。レイに、いや。ティアには触れていれば、想うだけで通じるって」

人間だった壱朗はもういない。真祖としての壱朗はティアの知っている壱朗と同じように柔らかく微笑み、黙っている。

「……そういう意地悪な所は嫌いです。優しくして下さいとは言いませんので、お願いですから嘘はつかないで下さい。……それだけで、いいんです」

「嘘ついたの？ 俺が？」

約束は守れと曾爺さんに躑けられた俺が、嘘なんて付くのかなあ

「はい」

「なんて?」

「……えっと。その。私が……『生まれて初めて愛した女だ』と……」

……だから、あんなにも俺の過去昔の女の話に食いついてきたのか。しかし、あり得ないな。何百年も生きると俺は嘘つきになるのか? いや、待てよ? 初めて会ったのが今日……いや、もう昨日かな。だとすると……

「ん〜。ティアこそ、嘘ついてない?」

「ついた事などありません!」

「そうかな? 俺は『ティアに出会って初めて愛を知った』なんて風に言ったんじゃない?」

ティアの表情が驚きに染まる。『何でわかるんですか?』『過去の、いや未来の? 記憶まで引きずり出せるように能力が上がったんですか?』『こんなにも早く?』という様な意思が伝わってくる。同時に、その表情がとても分かりやすい、拗ねた様な表情に変化する。

「……そんな感じだったかも知れません……」

「嘘じゃないよ。『人間だった彼方 吉朗』はひと目『レイ』を見た時に初めて愛を知った。他の嘘は分からないけど、それだけは嘘じゃないよ」

吉朗の今の言葉に嘘はない。ティアにもそれは伝わった。
きつと吉朗の過去は、本当に愛のある物では無かったのだろう。
御飯事おまめじの様な、憧れだけの付き合いや結婚だったのだ。別れて当然
とも言えるだろう。そう理解したティアは、吉朗の前で嬉しさを抑
えきれず、顔が堪え切れなくなる前に姿勢を正した。そして吉朗か
ら少し離れ、空気を変えようと口を開く。

「……………私も待っていますので、向こうに着いたらちゃんと解る
ように言っておいて下さい」

情報を持って行くなという伝言に従う為、ティアに財布や携帯電
話などをまとめて預け 流石に服ぐらい良いよな。とも思
いながら、言葉を返す。

「今のティアみたいに、泣いてないといいけど」
「泣いてなんていません！」

空気を変える事などできる筈もなく、言い負かされた悔しさより
も嬉しさから、目の端に涙を溜めているティアを後目に吉朗は考え、
決意する。

過去のティアに会いに行くか。曾爺さんの仇を取る力を得る為
に

覚悟を決めた瞬間。吉朗の周りの景色がぼやけ始め、陽炎のよう
にゆらゆらと漂い始める。

ああ、真袒ってこんなに簡単に力を行使できるのか。すごいな

「ティア、帰ってきた俺をよろしくな」

「はい。御迷惑をおかけするとは思いますが、未熟な私をよろしく
お願いします」

「任せとけ」

だんだんとかすれて見えなくなっていく壱朗に、ティアはこの数十年で考えた『会心の一声』をかける。

「愛していますっ！ 御主人様っ！」

最後に吃驚した表情をティアの心に残したまま、壱朗の姿は消え去った。

ティアも壱朗が眠りに着いてから知つたのだが、西暦2000初頭には爆発的な人気を誇つた形だけのメイドのいる喫茶店は壱朗が生まれた頃には完全に衰退していた。そして今も生きているサブカ^通ルチャー愛好家達の間ですら、メイドに御主人様と呼ばせる行為は過去のモノとして嘲笑の対象となっている。

逆にそれが可能な存在は、本当の意味での超上流階級層であり、名実ともに貴族、華族、名士等と呼ばれる事に恥じる事なき実績と血族を持つ者だけの特権になった。

つまり、先程まで此処にいた壱朗は庶民であり、御主人様等という呼び方をされる事は会社の宴会で酔っ払っても経験した事のない、赤面モノの罰ゲームか何かだと認識していたハズである。

事実、ティアは吉朗と共に三千年もの時間を過ごしたがその間ずっと『御主人様』と呼ぶことは禁じられていた。

『してやったり』とティアはその豊かな胸を張って、やりきったと思っていた。だがしかし、ティアのこの行動のせいで向こうに着いた直後の吉朗は、あまりの恥ずかしさに地面に転がって悶えていた。

そして吉朗は『次にティアに会ったら絶対に苛めてやる！』『絶対に御主人様とは呼ばせない！』と決意するのだが、ティアがそんな事には気が付く筈もなかったのである。

第04話 記憶と帰還（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第04話 記憶と帰還

「生りたての真祖
元人間 吉朗」を送り出した現在、ティアはすぐに「成熟した
真祖 吉朗」を迎える為の準備を始めていた。
タイムパラドックス
世界の修正力との衝突を避ける為、「成熟した真祖
真祖 吉朗」は絶賛冬眠中
なのだった。

吉朗の曾祖父が生まれておらず、第一次世界大戦も避ける為に西
暦1900年から2100年迄の二百年間、紛争のない地域に、自
分専用の地下四〇階ぐらいの墓所を掘ったのだ。墓所の場所は、戸
籍が偽造しやすいお隣の大国を選んだ。
名前とは裏腹に
人口過剰な国

そして「成熟した真祖 吉朗」を迎える為の門を開く準備を済ませ、起き
てくるのを待ちながら、「生りたての真祖
元人間 吉朗」の顔を思い出す。

生りたての吉朗様、ちょっと目つきが優しかったなあ……

日本で幼年期整形が流行り出して五十年。今では三十代までの男
女の90%が普通以上の美形だ。残りの10%のうち9%が超美形。
1%が不細工でありたい変わり者か、幼年期に手術をしないまま忘
れている者だ。

だが、吸血鬼は血に大きく左右される生き物だ。だからこそ幼年
期のDNA形成型整形手術が効果を発揮しない。もし整形していた
としても吸血鬼のDNAは医療用のDNAなどよりもはるかに強く、
本来あるべき顔に戻ってしまう。

西暦2000年あたりのシリコンを入れるなどの整形手術をすれ
ば整形も可能だろう。しかし、吸血鬼は赤外線や紫外線すら視認で
異物

きてしまう存在だ。そんな吸血鬼からすれば、顔に異物を混入する鼻に洗濯ハサミを洗って鼻が高いと整形など不細工言っているに様にしているのと同じ事である。にしか見えない

恐らく、向こうでは『元人間 吉郎』の顔も本来あるべき造りに戻っているだろう。ティアが知っている『真祖 吉郎』の顔との差はほぼ無かったが。

それは吉郎の祖父のせいでもある。彼が元々、日本人らしい強面の顔つきで、美形とは言わないまでも渋い男前であった為、特に整形は必要無いと家族に幼少の頃に判断されたのだ。

吸血鬼で顔を変えた者は血統技能アヒリテイで変身や変装の能力を得た者が、長い時間をかけて少しずつ、顔の骨格の形を変えた者しかいない。

だが、吸血鬼の血統技能は基本一人一つだ。

理論上、核爆発クラスアヒリテイの力でも血統技能で身に着くかも知れない吸血鬼が、その血統技能が変身や変装等の能力だった場合、その吸血鬼は余程の事が無い限り、吸血鬼社会では弱者になってしまうだろう。

吸血鬼の能力は大きく分けて二つある。

吸血鬼であれば誰でも持つ種族能力スキル。

吸血鬼の真祖から派生する血統技能アヒリテイ。

種族能力スキルは吸血鬼であれば誰でも使えるし、覚える事ができる事から『能力』と呼ばれる。血統技能アヒリテイは血統の者しか使えない為、『血技』と呼ばれている。

種族能力スキルは『吸血』『不老』『再生』『怪力』『霧化』『蝙蝠化』『浮遊移動』など吸血鬼であれば誰でも得る事のできる12種類の能力であり、訓練や血の力の強さで強くすることが可能でもある。しかし限界もある。例えば、『霧化』したからといって霧の量が、元々の体積を超える量にはならない。

アヒリテイ スキル
血統技能は種族能力とは違い、その血統の真祖の『血技』に左右され、自分の系統の真祖の『血技』の派生版を得る。どの程度の違いが出るかは血の濃さによって変わる。『血技』は吸血鬼が経た年数や訓練により、強弱や能力そのものを変質させる事が可能だ。今のところ、その限界は知られていない。

現在のアメリカ合衆国には2人の真祖がいるが、そのうちの一人の真祖の『血技』は『重力』である。彼は真祖に生りたての時は、その『血技』で1t程度の物を持ちあげるのが精一杯だったが、移民である白人に迫害され、怒りにまかせて能力を振るうなどの過程を経て、現在ではニミッツ級航空母艦（約80000t）すら持ち上げる。

ティアは自身の『血技』を使用して習得した、結界術の一つである『ゲート門』を発動させている。これは指定した場所との空間歪曲移動を可能にするものである。

ティアは吉朗の曾祖父が『彼方』を名乗ってからずっと、『彼方吉朗』の生まれる環境を守る為、『彼方一族が不幸に襲われない結界』を張り続けてきた。2100年元旦に吉朗が初詣に来るまでは、ほぼずっと神社の地下に籠りきりで結界を維持していた。

タイムパラドックス
世界の修正力との衝突を避ける為、今日まで吉朗の姿を直接見れなかったのだ。今日からは吉朗の家に押しかけ、子供の頃の写真など色々見せてもらおうと心に決めていた。

もちろん、吉朗が反対した時に対しての『言い訳の口実』も考えである。百年近くもの間、張り続けた『彼方一族が不幸に襲われない結界』が消滅した事で、幸福量保存の法則に従って、その反動から彼方家には不幸が降りかかる筈だ。

だから家に住み込んで、家族の皆さんを守らなければいけない。

という言い訳だ。ちなみに幸福量保存の法則が否定されようとしても、壱朗の曾祖父が吸血鬼に襲われて死亡したのは、ティアが結界を維持できなくなったせいかもしれないと言うつもりだし、それを口に出す事を許す程『壱朗様』は酷い主では無いとティアは認識している。

そして、旅立った壱朗との『帰属儀式』の正式な完了により、彼方血族の眷族になった為、今まで彼方一族が避けてきた筈の不幸が、ティアにも降りかかる筈だとティアは思っていた。

不穏な気配を　それなりの吸血鬼の　感じ、ティアは肩に羽織ったコートボーションをきちんと着込む。見知らぬ吸血鬼等にティアの整った体つきを見せてやる義理はない。

『　キンツ　』と澄んだかすかな音の鳴った後、人間の胴体よりも太い氷柱コトがティアの後方から飛来し、襲いかかる。それを壱朗の指示で習得した武術のお陰で、振り向く事もなく認識する。その氷柱を紙一重で躲す。大事な　壱朗が冬眠する前に最後に選んだティアのお気に入りコトの　純白のコートが汚れない程度には離れてではあるが。

「何か用であるのならまずは名乗りなさい。いきなり攻撃を仕掛ける等と、どこの下賤の者ですか？」

ティアはそう言うてはいるが、氷柱という攻撃方法を認識した瞬間に相手の素性は、おおよそではあるが見当を付けている。フランス在住の真祖、『ラマルティーヌ卿』の二世以降の者だろう。『水氷』の血技は『氷の貴公子』とも呼ばれる、ラマルティーヌ卿の系

統が最も有名だ。ただし、『水氷』の血技以外にも氷柱を作り出すだけならば可能な為、『水氷』を真似ている可能性を考えて聞いているに過ぎない。

「女。先程、此処で生まれた真祖がいるだろう。今すぐに差し出せ」

振り向き、歩道橋の上に佇む男の顔を見る。服装は上質。金髪碧眼で身長も高く腰の位置も高い。白人系だ。そして、男の顔がそれなりに整った者である事とティアを真祖だと勘違いしなかつた事から、三世以上だと判断し、男を侮辱するべき言葉を選ぶ。

「『氷の貴公子』は眷族の躰もできない方だと有名ですが、名乗りも上げられないようですね。それとも、四世以降の当主の顔も分からない程度の吸血鬼なのでしょうか？」

三世より血の濃い吸血鬼にとって、四世代以下に見られる事は屈辱以外の何物でもなかった。

「女。五体満足でいられると思うなよ！ 真祖共々、四肢を切り落とした状態で我が主の元へ届けてくれるわ！」

男はそう言いながら両腕を前に持ちあげ、『怪力』を発動させたのか、指と爪が四肢を引きちぎる為の鋭さを持つ凶器へと変質していく。

ティアは確信する。『これで相手はラマルティーヌ卿の手の三世で間違いない。二世ならラマルティーヌの姓を許可されているはずだから、プライドにかけて名乗る筈』と。『恐らく、日本に唯一いる真祖がラマルティーヌ卿への借りを返す、という名目で日本の真祖誕生の時期を教えたのだろう』とも判断していた。

しかし、一番最初に問題を起すのがティアが最も嫌いなラマルテイー又卿とは。『これも降りかかる不幸の一環かしら……』等と考えながら体勢を変え時間を稼ぐ為の台詞を考える。

「それが可能だとしても？ 我が主は今、『血技』の試技で此処を離れておられるがすぐに戻られる。『氷の貴公子』程度の千年も生きていない真祖の眷族ごとき、我が主は相手にせぬわ。相手をして欲しくば、『城』^{ホーム}に逃げ帰り、主を連れて来くるがいい！」

今のティアは百年にも及んだ『結界』の維持と今開いたままの『扉』^ドの為に9割程の力を失っていた。だから相手を挑発し、近接戦闘を挑ませて体術と会話だけで、吉朗が戻るまでの時間を稼ぐ心算だった。

「生まれたての真祖などに帰属した程度の分際で……我が主を侮辱する者は決して許さん！！」

『帰属の儀式』を見られていた事という事は、この吸血鬼はかなり遠くからこちらの様子を伺っていた事を理解した。何故なら、この吸血鬼の気配は先程まで感じなかった。という事は半径10 km以内に居なかつたはずだ。

三世で10 kmの移動にこの位^{10分以上}の時間をかけると言う事は、ティアにとつては大した相手では無いと判断していた。

ティアの表情から『大した相手では無い』という評価を読み取った男は、その事実さらに侮辱だと怒り狂い、『怪力』に加え『血技』を發揮しようとした。

その瞬間

「俺の眷族に何しようとしてやがる。餓鬼^{ガキ}」

空間が軋んでいるのではないかと思わせる程の存在感を身に纏った吉朗が、男の隣に存在していた。

「なっ
」

「五月蠅い。喋ろうとするな。口を開けるな。腐った豚の臭いが広がるだろうが」

その瞬間から、男は指一本1ミリたりとも動かさなかった。いや、動かさなかった。動かせば死ぬ。呼吸すら、するなと自身の『血』が言っている。

「御帰りなさいませ。吉朗様」

ティアは隣いる男を完全に無視し、優雅に頭を下げて挨拶をする。

「おう、おはよう。ティア。俺は嘔吐きだったか？」

「いえ。嘔つきではなく、ただの意地悪だと、再度理解致しました」「酷いな。俺に愛していると叫んだ癖に」

今の吉朗は旅立った頃の記憶など、ほぼ覚えていなかった。しかし『帰属の儀式』が完了したのだ。ティアの記憶を覗き、どんなやり取りをしたかを引き出す事など、眠っていても可能だった。

「あ、あれは、可愛らしい反応をなさる、吉朗様に申し上げたのです！ 意地悪な貴方様に言ったではありません！」

「……………嬉し泣きしてたくせに」

「　　っ！　もっっ！　意地悪ばかり言うなら膝枕も、添い寝もしてあげませんよ！」

「それは困る。狭く硬い棺桶で眠るのにはもう飽きた。今日はティアの膝枕で寝ると決めてるんだ」

「だったら、意地悪を言うのはおやめ下さい。……………棺桶が嫌だなんて言う吸血鬼は、杏朗様か、四世以下の吸血鬼クズぐらいですよ……………」

「……………そうか？
だがそれはそれと、別にしたとしても、今日はずっととっておいた初めてを貰わないといけないしな」

その言葉を聞いた瞬間、ティアは杏朗が『冬眠』に入ってから二百年の間、考えない様になっていた杏朗との約束を思い出した。

「　　っ！！」

ティアは顔、耳、手、足、と肌が見えている個所を順番に、その全てを赤くして一言も言葉を発しなくなった。

「さて、ティアが再起動する前に面倒事から片付けるか」

杏朗は隣に立つ吸血鬼に首から上だけを向け、完全に見下した目で命令した。

「　　聞いてやる。名乗れ。餓鬼ガキ」

第05話 待ち続けた約束（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第05話 待ち続けた約束

「聞いてやる。名乗れ。餓鬼^{ガキ}」

男は目の前の現象が理解できなかった。

できなかったが言う通りにしなければいけないと『血』が騒いでいる。

それを抑え^{二世と同等}られる程の力がなかった男は、言われた通りに名乗る。

「ふ、フランスはマコンにおわします、ラマルティエ^{ラマルティエ}又卿が三世の
ピエール・オリヴィエと申します。」

我が主、ラマルティエ^{ラマルティエ}又卿の命により、生まれたばかりの
真祖様をお迎えに上がりました」

「ふん。お迎に、な」

ピエールは知らなかったが、吉朗はティアの創った『^{ゲート}門』の向こ
う側で会話を聞いていた。つまり、ティアに『四肢を切り落とす』
などと暴言を吐いていた事も知っていた。

「わ、我が主は、新たなる15番目の真祖様の誕生を祝い、その将
来を思えばこそ、フランスへの移住を……『黙れ。俺は話していい
と言ったか？ 名乗れと言っただけだ』……はっ。……」

生りたての真祖は固有の血統^{アレルティ}技能を生み出す可能性が血に込めら
れており、真祖の血の安定するまでの百年間は血の質が違つ。

その血は二世、三世の吸血鬼にとって『^{生きた年数}血の熟成』と『努力』以
外の方法で力を得る絶好の機会となる。

真祖は他の真祖の血から力を得る事は出来ないが、生りたての真

祖の血液は極上のワインよりも美味であり、処女の血液よりも上等な嗜好品である。

だからこそ、生りたての真祖は他の真祖に飼われる場合が多い。吸血鬼はほとんどの場合、吸血鬼の子を成せない。

真祖以外が吸血鬼を産んだ例は一度もない。ごく稀に、真祖同士の間にも真祖が生まれる事があるが、それも過去に二人だけしか例が無い。

では真祖以外の吸血鬼には、子供が作れないのかと言われるれば、そういう訳ではない。ただ、百年かけても一人もできない場合もあるし、それに生れてくる子供は何故か、唯の人間になる。そして、吸血鬼から生まれた子供が真祖となった例も、一度もない。

故に真祖の血が欲しければ、誕生した者を見つけ出すしかない。そう認識されているのが普通だ。

ピエールには訳が分からなかった。自分より上位血族のである二世の方と共に過去に二度に渡り、真祖の捕縛を行った事がある。

現在、真祖で12番目と14番目と呼ばれる方の時だった。その時の生りたての真祖は両方とも生れてから50年は経っていたが、それでも二世である自分でも十分に連れ帰る事が可能な程度の力しか持っていないかった。

しかもピエールは三百年しか生きていない三世でありながら、生りたての真祖の血を二度も飲み、三世としては世界でもトップクラスの吸血鬼の筈だった。

「しかし、ラマルティエーヌか……あのアンドレのクソガキが……二百歳ぐらいの時に、なりたての血は吸うなとお仕置きしたはずだっ

たが。あの程度じゃ、お仕置きが足りなかつたか？」

ピエールは目の前の真祖が呟いている言葉が信じられなかった。彼の言うアンドレとは、恐らくアンドレ・ラマルティーヌの事。つまり七百年も生きている真祖であるはずの我が主を『クソガキ』等と言っている事になる。そんな事が言える存在はこの世に三人しかない筈だった。いや、四人か。

どちらにせよ、『生りたての真祖』にできる言動では無い。つまり、この真祖は先程まで此処にいた『生りたての真祖』ではないという事だろうか。顔はほぼ同じだが、服装が違う。別の真祖が年齢と外見を調整して、同じ顔に見せているのだろうか。

吸血鬼であれば『不老』で年齢を調節できる。訓練しなければ吸血鬼の外見は普通に年を取る。逆に訓練すれば赤ん坊の姿にもなれるし、老人にもなれる。年を取るのと同じだけの時間が必要となるが。つまり、10歳の吸血鬼は70歳の姿になるのに60年かかるし、70歳の吸血鬼が10歳になるのにも60年かかるのである。大抵は気に入った年齢で現状維持をする。

しかし、ピエールの『血』が違うと騒ぐ。先程まで此処にいた『生りたての真祖』と目の前の真祖は同じ人物だと『血』が言っている。先程『帰属の儀式』をしていた、眷族の女が従っているのが何よりの証拠だ。

眷属は主に『吸血』によって創られる。真祖が直接吸血し、創った吸血鬼は二世。二世が創れば三世。三世以降は血が薄く、真祖とのつながりも希薄で力もかなり弱くなる。実際、四世以降の吸血鬼は、人間でも一流の武道家なら十分に相手にできるレベルに収まる。

吸血鬼が世界中で受け入れられている最も大きな理由は、吸血鬼全体の90%以上を占める四世以降の吸血鬼が、人間でも十分管理可能な程度の力しか持っていない事だと言われている。

一般人が四世以降の吸血鬼になったとしても『霧化』や『蝙蝠化』で飛んで逃げられない限り、警察官二、三人で取り押さえる事が十分に可能だ。

しかし、三世より血の濃い吸血鬼は別である。世界に十四人しかいない真祖の大半が、人類との共存を約束しているからこそ大人しくしているが、弱点などを考慮しなければ、三世ですら完全武装の軍隊一個師団に匹敵する。二世や真祖など対比評価すら難しいだろう。

つまり、人間には簡単に管理しかねる自由を持つ者が三世以上。人類に管理可能なのが四世以下という明確な違いがある。そして、その世代の違いは百年程度の『血の熟成』では覆せない程に大きい。

年齢による力の増加
『血の熟成』という意味だけで言ってしまうと、百歳の真祖は千歳の二世で、千歳の二世は、二千歳の三世と同等である。

現在の最高齢の真祖が二千歳、という事実を顧みれば、西暦2100年までの吸血鬼社会では現状の序列を覆す存在はいなかったし、不可能に近かったのである。

「おい、ガキ餓鬼。この時期に真祖が生まれる話を教えたのは日巫女ひみこで間違いはないな」

ピエールは言葉を発することなく、首を縦に振るだけだからうじて答える。

「あの女……よし、新年の挨拶も兼ねて殴りに行くか……」

「あの。吉朗様。日巫女様とは一応ではありますがありますが不可侵の取引をしておりますので、それはちょっと……」

再起動を果たしたのか、ティアが吉朗の行動を止めようとする。

「何で、不可侵なんだ？」

「私の日本での結界を許可して頂く為です。煩わしい揉め事は避けるべきかと思ひまして……」

「……いや、殴りに行く。というか見てるだろ、あの女なら。

もう二千歳を超えたババアだし、ティアの結界の中でも状況は見れてたはずだ」

「で、でも『約束』したんですよ？」

「………」

「………」

「……しかたない。文句だけ言いに行く」

ピエールはすぐに主の元に舞い戻り、この状況を伝え、判断を仰ぎたかった。主の事をクソガキと呼び、血年齢の熟成だけなら現在の吸血鬼社会の中でもトップのはずの日巫女様ひみこをババア等と呼び、殴るとまで言っている。

しかも、それが可能だと『血』が理解している事実に混乱していた。

ピエールは先程までの事を頭の中で整理してみた。

ピエールは生まれたばかりの真祖を発見し、その傍にいる女吸血鬼をどのように排除するかを考えていた。すると女吸血鬼は『帰属

の儀式』を行っていた。つまり、女吸血鬼は『はぐれ吸血鬼』だったわけだ。

『はぐれ吸血鬼』に相応しく、魔力も大した事はなさそうだったが『生りたての真祖』が、陽炎のように消えてしまった。もしかすると女吸血鬼の『血技』で逃がしたのかと、すぐさまその場所へと向かい、何らかの儀式を行っていた女吸血鬼に聞いたのだ。

その直後、消えた筈の『生りたての真祖』が服を着替え、とんでもない存在感をその身に宿して隣に立っていた。

消えてから再び現れるまで、1時間も経っていない。そして吸血鬼が最も信頼する、『自分の血』が同一人物だと告げている。

整理してみても、全く訳が分からなかった。

なんとかこの場を離れ、主に早く伝えるのが最優先の使命だと考え、この場に居たくない、逃げ出したいというのが本音だったが、ようとした、その時、吉朗の目が再び、ピエールを捕えた。

「おい。餓鬼ガキ、さつきまでの無礼ムレについては、お前の主の責任だ。とつと尻尾を巻いて帰れ。んで言うておけ、『14番目を連れて、一週間以内に謝罪に來い。來なければ、こちらから出向いてお前の絵画コレクションを全部燃やす』とな」

「ひいっ！ 理解致しました！ 今すぐに帰り戻り、主に
お伝えさせて頂きますです」

よく分からない言葉遣いになったピエールに、吉朗は首を傾げていたが『もう興味はない』とばかりに、犬を追い払う様に手を振られ、ピエールはその場を逃げ出した。

ティアは、ピエールの負け犬っぽさがなんとなく可哀想だったが、杏朗の気まずそうな雰囲気から、弱い者苛めをした気分になったんだらうなあ。と察した。

「よろしかったのですか？ あのまま行かせてしまっても」

「問題ない。『タイムパラドックス世界の修正力との衝突』は起こっていない様だから、これからは正体を隠す必要もない」

杏朗の目が自分の服装に向けられた気がして、ティアは純白のコートの裾や襟などの身だしなみがおかしくないか、さり気無くチェックした後、簡素に問いかける。

「では？」

「ああ、すぐにでも仕事を始める。まずは曾爺さんの仇討ち、その後、他の真祖のクソガキどもの目を覚まさせる準備。そんなトコだな」

ティアはコートのポケットから符を取りだすと、目を瞑り額に当てる。

「確認致しました。犯人の吸血鬼は今、京都の街の貧民街区画で死肉を漁っていますね。これが情報です」

追跡用に飛ばしている蝙蝠 といってもティアの体の一部を『蝙蝠化』させたモノだが をずっと犯人の吸血鬼に張りつかせていたのだ。そこから得た情報を式符に込めていく。

「よし、ちよつと眠気覚ましの運動がてら、行ってくる。」

ティアは一応、俺の家族を頼む。その後は寢床を確保して、隅々まで綺麗に磨いておけよ？ 俺は一切我慢するつもりが無いからな？

寝床の場所は任せるが、明後日までは滞在できる場所にしてくれ。

そう言つて、吉朗は空へと浮かび上がった。吉朗の背中には、飛行を補助する透明な渦が四つ、五つ見える。その渦がロケットの様に力を吐きだす事を知っているティアは、吉朗が飛び立つ前に返事を間に合わせる。

「っ！ は、はい。準備もちゃんと、綺麗にして、お待ち、して、おります」

その言葉が耳に届いた瞬間、吉朗はティアに視線をやりながら、尖った犬歯をかすかに覗かせてニヤリと笑った。それをティアが目にし、再び顔が赤くなりそうになった所で、透明な渦は爆発し、吉朗を空の彼方へと運んで行った。

ティアはこの後の事を考えた。

これで恐らく、吉朗様は一時間以上は戻らないだろう。

犯人の吸血鬼を消滅させるか、明日以降に虐める為に半殺しにして捕縛するか、どちらかを行うまでは。

吉朗様がそんな事をしている間に移動して、体を清めよう。吉朗様の家族の事と、寝床の事を頼まれたが、そんな準備はとくに済ませている。

ティアにしてみれば三千年も待った初めてなのだ。出会った頃は、それこそティアの方から何度もアプローチしたのだが、『タイム世界の修正力との衝突』の影響を理由に、やんわりと断られてきた。

壱朗様は『女を本気で抱くのは消滅させる相手だけだ』とずっと言っていた。消滅させない女を抱くのは、八千年程我慢していると聞かされていた。

壱朗様の旅立ち 今回の予定が『世界の修正力との衝突』を生むことなく、上手くいった時には最後まできつちり抱く。それが冬眠する前の壱朗様と交わした『約束』だ。壱朗様は『約束』は守る方だ。

やっと正式な眷族に成れた、しかも今日が初夜となる。寢床は部屋から見える景色までちゃんと厳選して、三ヶ月前から半年間前払いで、高級ホテルの最上階を1フロア丸ごと貸し切った。下の階から天井を叩く阿呆が居ない限り、邪魔は入らないはずだ。

ホテルの部屋 1600年辺りのアンティークが搬入済み 自分好みの調度品に変えてある へと向かいながら、だんだんと実感が湧き始めたティアの頭の中では、嬉しさと恥かしさから生まれた妄想が凄い事になっていた。

しかし妄想の最中、ティアはふと、気付いてしまった。

キスや触れるだけで 最後までしないでも、ティアは三千年の間、ずっと壱朗に満足させられてきたのである。しかも壱朗は、興が乗ると意地の悪さが三倍程になる。

そんな壱朗の『本気』の相手をして『明後日の自分は生きていられるのだろうか』と、かなり本気で不安になるのだった……………

第06話 初夜と真実（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第06話 初夜と真実

『冬眠』から目覚めてから8時間後、腕の中のティアの身じろぎを感じ、壱朗は意識を通常レベルに覚醒させる。

「あ、申し訳ありません。起してしまいましたか？」

「いや、寝てはいなかったと思う。まどろんでいただけの気がする」

気を使おうが何だろうが、今の状態着族になつたのティアに『嘘』は意味が無い。触れていれば、全て理解されてしまうからだ。

ピエールを追い返してから、京都の街の貧民街区スラム画で仇の吸血鬼ターゲットを捕捉した壱朗は、『縛符』と呼んでいるティアのお手製の札で、身動き一つできない状態にして、ティアの用意した部屋の隣に放り込んでおいた。

そして家族に、曾爺さんの仇を見つけたので追いかけると連絡を入れた。すぐに家に帰らなかったのは、壱朗は曾爺さんが死亡した時の壱朗ではないからだ。

何千年を生き、友人を殺された事もあれば、逆に友に裏切られて殺した事もある。今すぐ家に帰っても、家族と同じ気持ちになる事は出来なかった。

だからこそ、ティアと二人で部屋に籠った。それから四時間。

徹底的にティアを堪能あした。まだまだ足りないし、やめる気もないが、それでも力を限界まで消費していたティアには、休息は必要だった。

壱朗が散々注ぎ、つき込んだ魔力体液のお陰で、ティアの髪も元々の金髪に戻っていたし、肌の色も艶も先程までとは段違いに美しい。

ティア自身の魔力も大体、元に戻っているだろう。その分、体力は消費しているだろうが。

人間だった吉朗
過去へ旅だった吉朗は知らなかったが、初めて会った時の銀髪にも見えた灰色の髪は、魔力を消費しすぎたの白髪になってしまっていただけである。ティアの目は灰色だが、髪は元々綺麗な金髪だ。

「吉朗様は、最初に何処に行かれたのですか？」

「最初か？ 空も飛べなかつただろうし、使えたのは能力の『怪力』ぐらいだっただろうし、そのまま過去に飛んただけだと思うぞ？」

「あ、そうですね。私と初めて会った時には、吉朗様は既に真祖としてもすごい方でしたので勘違いしてました」

ティアは吉朗の胸に顔を擦り寄せ、甘えている。今日までの三千年、心のどこかで不安を抱えていたのだろう。ティアの生まれた時代の知識では『時間跳躍』という概念がまず理解できなかった。それが意識の共有できない不安の一つになっていた。逆に理解できてしまつてからは余計に不安になった様だった。

とにかく『生りたての吉朗』を送りだしてしまえば、『世界の修正力との衝突』は起こり得ない、吉朗はそう定義していた。

ティアが一人で『結界』を百五十年間維持できる力を付けた時、この計画を実行した。吉朗が最大級の『結界』で墓所と棺を覆う。その中に自分を閉じ込め『冬眠』し、ティアが一人で彼方一族を『不幸に襲われなくなる結界』で守る。

ティアは『彼方』という姓が生まれた事を確認した、西暦2000年から西暦2100年までの百年間、神社の地下に籠って地下で結界を維持し続けた。

たまに遊びに外に出たらしいが、それ以外はずっと籠り、上手くいった時に吉朗としたい事を幾つも考えて、時を過ごしていたらし

い。

そして『彼方 吉朗』は歴史通りに生まれて、無事送り出された。ティアは時間の許す限り、三千年一緒にいても教えなかった事を全部聞こうと心に決めているようだ。

「どれぐらい昔に跳ばれたのですか？」

「ん〜。そのあたりは覚えてねえな。『魔血晶^{背中}』、触っていいぞ？」

「あ、はい」

吉朗の背中には『魔血晶』が16個付いている。この『魔血晶』の数は吸血鬼の生きてきた年数に応じて変動する。ティアは抱きついた姿勢のまま、左手で背中を探る様に撫で、目当ての『魔血晶』を見つけた。

「あ、ありました。初めは大正時代と呼ばれる時代に跳ばれたようですね」

ティアが『魔血晶』の内でも、最初の頃を記録している物を触りながら言ってくる。吉朗の記録や記憶に関する事を知る事が自体が、嬉しいのだろう。声が弾んでいた。ティアの触れている『魔血晶』に意識を集中し、思い出そうとする。

「あ〜、そうだったな。初めは日本特有の古武術をできるだけ習得して、第二次世界大戦が起こる前にアメリカへと渡ったんだ」

「第二次世界大戦、ですか……あまりいい時代では無かったです。私も吉朗様が『冬眠』されてからは日巫女^{ひまこ}様の元にお邪魔していて、ほとんど地下から出ませんでした」

「まあ、『酋長』が生きてる限りは、もう二度とアメリカが戦争を起す事はないだろうがな」

「私はお会いした事がありません。どの様な方ですか？」

「そうだな、気のいい爺さんって感じたな。もう千二百年は生きてるはずだ」

ティアは顔を上げ、吉朗の顔を覗きこむと不思議そうに聞いてきた。

「『酋長』様は千二百年生きておいでなのに、戦争を止めなかったのですか？」

「止めようとはしたんだろうがなあ……………」

「御存知ないのですか？」

「俺にとっちゃ、歴史への介入は禁忌タブーだったからな。止めろとも言えねえし、協力もできなかったしな。詳しい話は今度、『酋長』と酒でも飲みながら聞くんもりだ。今のアメリカは恐らく『酋長』が他の真祖ガキを抑えてるんだろ」

ラマルティーヌ卿と同じような真祖がアメリカにも居る様なモノなのか、とティアは理解したようだ。

「とにかく、大陸を変えて西暦900年〜1900年の間を何度も生きたな」

「ずっと不思議だったんです。何故、その期間だったんですか？」

ティアとは最近の三千年しか一緒に暮らしていないが、それでも吉朗と二度、過去に跳んでいる。その時から考えていたんだろう。

「西暦900年より前に跳んで、誤ってティアの祖先を殺す訳にもいかないだろ？」

「……………っ！　そ、そういう事をしれっと言うのはずるいと思いませんっ！」

真つ赤になつた顔を隠す為に、ティアは再度、吉朗の胸に顔を埋め、掛け布団を頭の上まで引き上げた。

ティアは吉朗が西暦900年より昔に跳ばないのは、ティアが生まれてくるのを守る為だと初めて気付いたようだ。

タイムパラドックス
世界の修正力との衝突から百五十年は身を守る程の結界術が完成するまでは、『1900年の壁は越えられない』とティアはずつと教えられていた。だからちょうど1000年^{さかのほ}遡るのは、ただの区切りだと勘違いしていた。

西暦900年にはティアは吸血鬼になっていた筈だ。

「今だから言うけどな。ティア、過去に行く前の俺に『帰属の儀式』しただろ。あれのせいで、俺はティアのある程度の情報を持ったまま、過去に跳んだ。しかも、出会った時から、触れてればティアの思考は俺にダダ漏れだ」

「~~~~~っ!!」

ティアは布団に籠りながら、吉朗のお腹を抓りまくった。ティアが触れているせいでティアの思考が吉朗に流れ込んでくる。

『恥かすぎる！ 二十歳超えた後なんて、毎晩の様にアプローチしたし、毎晩ベッドに入りこむのに、さり気無さを装うのに必死だったはずなのに！ なのにそんな思考がずつと伝わっていたなんて！』

ティアは当時を思い出しただけで、悶え死にしそうになっているようだった。

「ま、それを黙ってたのは、ティアが俺を送り出した時に『御主人様』って呼んだからなんだが」

「……………うう。やったと思ったのに……仕返してきたと思ったのに……………」

ティアはかなり血の濃い二世だったが、主を失った後で壱朗に拾われて帰属する事を望んだ。理由は簡単だった。

『理性を失いたくない』ただそれだけ。

吸血鬼は記憶が脳の容量の限界を超えた時点で理性を失い、ただの獣と化す。吸血鬼であったとしても脳の容量は人間と変わらない。ただ、人間が30%以下しか使っていないモノを100%使えるだけの話である。

吸血鬼が理性が保てたとしても、およそ五百年が限界だ。それは真祖だろうが、二世だろうが変わらない。五百年以降は何もしなければ、人格を形成していた部分の記憶が消えてしまい、発狂し、理性のない化け物になり下がる。

そして、そんな限界を安全に回避する唯一の方法がある。

それが『記憶の結晶化』である。

『記憶の結晶化』は吸血鬼の記憶とDNAを引きずり出し、吸血鬼の背中に『魔血晶』を作り出す。これは真祖にしかできない上に、どの記憶を結晶化するのかも真祖の判断に委ねられる。

そして消去も、破壊も、真祖の思いのままだ。

例えば、真祖がその血族者の性格が嫌いだった場合、性格形成する部分の記憶を結晶化し、背中に埋め込まずに破壊したでしょう。

するとその吸血鬼は生きてきた記憶はあるのに、自分の好みや主義などが白紙に戻ってしまっている。その為、『血』の指示に従い、

ロボットの様に真祖の言葉にだけ従う様になつてしまう。

二世以降の吸血鬼の寿命と運命は、真祖に握られているのである。どんなに二世や三世が力を手に入れて、物理的な強さで真祖を超えてしまおうが、『死』や『血の束縛』という概念から抜け出すには真祖に尽くすしかないのである。

安全ではないが、もう一つ方法がある。

それは『脳の消滅』である。

ただ破壊しても、吸血鬼の脳細胞は時間が経てば、記憶も元通りに復元される。だが『聖水をかけ、炎で焼かれた脳細胞』には記憶が復元されない。外見的にも能力的にも復元はされるが、新しい脳細胞となつてしまい、あつたはずの記憶が消えてしまう。

この方法が安全でない理由は、『どの記憶が消えるか全くわからない』事だ。この方法がとられた場合、最悪、体の大きな赤ん坊の吸血鬼が誕生する。『魔血晶』が一つでも背中になれば、そこから生活の方法などは復元できるだろうが、それすらない場合、本当の赤子と同じになる。体と力は化け物並みの、である。

医学の発達により、脳のどの部分が、どのような記憶を司るか分かってきてはいるが、それでも完全ではなく、自分で実験したいと言う吸血鬼も居ないだろう。

自分の姉が真祖になつた翌日に、ティアは二世の吸血鬼になつた。平穩に暮らせたのは最初の数年だけで、最終的には教会から迫害される。姉は、ティアを吸血鬼にしてしまった事を悔み、ティアを村から逃がす為、真祖でありながら民に殺される事を受け入れた。

そこに前もって知っていた吉朗がティアを迎えに来たのである。

そして今、壱朗の言葉でティアは気付いた。
『壱朗はティアの情報を持ったまま過去に飛んだ』 そう言ったのだ。
つまり、迎えに来れるだけの情報は知っていた。

『壱朗は知っていて姉を見殺しにした』
ティアの吸血鬼化も、止めようと思えば止められた。

その瞬間、壱朗の腹を抓っていたティアの指に込められていた力が、何倍にもなつて腹から血が噴き出し、肉がえぐれる。

掛け布団で顔が見えないティアに、責める事もせず、壱朗はただ聞いてみる。

「……………恨むか？ ティア」

「……………解りません。『たら』『れば』に意味はない。そう教えてくれたのも壱朗様です。……………私は、壱朗様と共に歩む生き方以外、知りません」

「……………」
「……………ですが、教えて下さい。何故、吸血鬼になるまで待ったのですか？ 何故、姉も一緒に救って下さらなかったのですか？」

「……………待った理由は『吸血鬼のティアが欲しかった』ただそれだけだ。他には何も考えなかった。ティアの姉の方も同じだ。誰もティアの主でいて欲しくなかったから、見捨てた」

『嘘』だ。壱朗の優しい『嘘』だった。伝わってしまう事も分かっている。

だが、壱朗は『嘘』をついた。

「『嘘』はつかないで、下さいと、お願い、したじゃ、ないですか」

吉朗の感情が流れ込み始めて、ティアは涙を止める事ができない様だった。

「覚えてないな」

それも『嘘』。旅立つ吉朗へのティアの願いは、今も覚えている。忘れた事など一度もなかった。冗談を言った事や、言いくく口籠った事はたくさんあったが、許されない『嘘』をついた事は一度もない。

ティアは吉朗の腹の傷に口を付け、癒そうとするかのように舐める。それと同時に当時の記憶がある『魔血晶』を探して、その記憶と感情の全てを見ようとした。

その当時、吉朗はティアの姉も助けようとした。その為にティアを迎えに行く時期をできるだけ遅くし、自分の『魔力の蓄積血の熟成』に五千年もの時間をかけた。

吸血鬼は、生きれば生きる程、その力は増す。『魔力の蓄積血の熟成』と言う概念は吉朗の為にある様なものだった。現代ですら日巫女の『魔力の蓄積血の熟成』が二千歳で最高だ。当時でその倍以上である。

力を得た吉朗は、できない事など何もないはずだと信じていた。

だが、それは大きな間違いだと気付かされる。

世界に『絶対』はない、と。

ティアの姉の血技は吉朗の血技と同じく、特殊であり強力だった。

『強奪』

ティアの姉の血技は、どんなモノをも奪う事ができる。そういう恐ろしい能力だった。血も、力も、『血技』も、奪う事が可能だ。能力の使用の代償に『血の熟成』を失うのだが、『血の熟成』すら奪えるのならば、補充は可能だった。吉朗の五千年もの『血の熟成』すら奪い、殺されかねない能力だった。

それを知っても、吉朗はティアの姉に救いの手を差し出した。

だが、ティアの姉はティアの為に死ぬ気だった。強力すぎる『強奪』は二世であるティアにも受け継がれ、そして二世であるが故に、代償を背負わせていた。

ティアはティアの姉とは違い、『強奪』を所持するだけで『血の熟成』を著しく消費する。それは記憶を失うのと同じ。そして、ずっと消費し続けていた。

つまり、ティアは吸血鬼であるだけで自然と死んでしまうのである。

吉朗は悩んでいたが、ティアの姉は答えを出していた。

『ティアから血技を『強奪』し、自分が死ぬ』

そうすれば、ティアは死ぬ事が無い。

他の真祖に帰属し、その真祖の血技を得ても問題はない。

だがティアの姉が生きていては、他の真祖へ帰属できないし、『血の熟成』と共に再び『強奪』の力に目覚めるだろう。

確かにその方法は有効だった。吉朗は血技の研究でどういった受け継がれ方をするのか、十分知っていた。だが、吉朗も食い下がる『自分ならばティアが吸血鬼になる前からやり直せる、過去を変えられる』と。

そして、^{真祖}ティアの姉は吉朗に笑顔で聞いた。

「それなら、もう既にやり直されているはずなんじゃないの？」

それ以降、吉朗は何もせず。ティアだけを助け、旅に出た。

^{真祖}ティアの姉とのやり取りはティアを助けた直後に『魔血晶』へと封じ込めておいた。思い出す事が無い様に、ティアに気付かれる事が無いように、と。それからの吉朗は、さらに歴史への介入を徹底的に避けるようになった。

全てを知ったティアは、必死に取り繕った陽気な声で話しかけてきた。

「『貴族の儀式』が成功した訳ですから、私も過去に跳べるんですかね？　ね、吉朗様？」

「……………そうだな。飛べるかもな」

「じゃあ、商店街で一週間前に食べ損ねた『2100年越しパフエ』も食べに行けますよね。一緒に行ってくださいます？」

「……………ああ、^{人簡だった吉朗}過去の俺に会わない様に、ならな」

「生まれたばかりの吉朗様の顔も見てみたいんですけど、いいです

か？」

「……俺は病院には入らないけどな」

「じゃあ、じゃあ……」

お姉ちゃんを助けに行きたいって言ったら、一緒に行ってくださいか？」

「……本気でお前が望むんならそうするさ。世界の修正力との衝突とだつて闘つてやるぞ」

ティアは、それ以上は自分を繕えていなかった。今の吉朗ですら、見るのが怖い、優しい笑顔を見たのだ。吉朗の記憶の中にあるティア姉は、見た事のない強い意志と、見惚れるぐらい綺麗な笑顔で、ティアの為に死を選んでいる。

ティアは耐えきれなくなったのだらう、暴れた。吉朗の腹筋を掴み、千切り、嗚咽も、涙も、我慢も、加減もできておらず、吉朗の腹筋はティアのせいでポロポロで、ベッドは血まみれだった。

「い、吉、朗様はつ。や、さしいからつ。きらいです」

「そうか。俺はティアが好きだ」

「もっつ、と。じょうつずに、嘘をついてほし、かつたです」

「そうだな。約束を破つたのは、あの時が初めてだと思つが練習するべきだな」

「嘘でつすよおお！ お姉えちゃんにも、いちろう様にもつ、嘘ついで欲しくなかつたつです！」

言葉と共に力任せに叩きつけられた両腕は、吉朗を傷つける事なく、吉朗でなければ大穴が空いていただらうが その下のベ

ツドだけを破壊し、とてつもない音を立てた。

「ああああああっ!!」

「泣いていい。今度は全部、俺が受け止めてやるから」

力任せに腕を振り回すティアの体を、物を壊さない様に片手で抱き締めて固定してから、ティアごと空中に浮かびあがり目を瞑る。ティアは暴れるのは止めたが、物凄い腕力で抱きつかれたままの状態になる。恐らく先程からずっと、無意識に『怪力』を使っているのだろう。吉朗でなければ圧迫死どころか、胴体が真っ二つになっているレベルだ。

「うっうっ……おねえちゃん……」

『PULLLL。PULLLL』

ティアがベッドを破壊した音が、下に響いたせいだろう。従業員からの確認の電話だと予測がつく。片手で受話器を取り、相手の話も聞かずに一方的に通達する。

「何だ。音なら気にするな、ただの痴話喧嘩だ。『邪魔しに来るなよ』」

吉朗は言葉に魔力を乗せて、来ない様に『言霊』で念を押ししていた。

「すみません。いちろうさま。また、ごめいわくをかけてしまいました……」

「なんだ、子供にでも戻ったのか？」

「ちやいますよ。ぎえんぎょちゅうしゅうぎゃ、おかしゅく」

「喋るな。思うだけで伝わるだろうが」
「あ……あい」

恐らく、体の混乱が言語中枢にまで及んだのだろうと察しておく。

『吉朗様、ごめんなさい』

「どうしたい？ ティア」

『何もできないですよ。過去つて変えられないですよ』

「恐らく無理だろうな」

『だから、お姉ちゃんは笑ってたんですよ』

「そうだな。ティアの事だけ考えて、満足してる笑顔だった」

『吉朗様は、死なないって約束してくれませんか？』

「それはどうだろうな。死なない存在はない。吸血鬼だっていつかは死ぬさ」

『じゃあ、私より先に死なないで下さい』

「ふむ。それは俺が嫌だな」

『むう、じゃあ一緒に死んで下さい』

「心中がしたいのか？」

『違います。解つてて聞いてますよね？』

「ああ、止む追えず死ぬ時は、一緒に死なせてやるよ。どんな事をしても死なさない様に散々、足掻いた後でならな」

『それでいいです。お姉さまの事は我慢します』

「お姉ちゃんの為にも、そのほうがいいな」

『その呼び方は忘れて下さい』

「お姉さまの為に強く生きる」

『はい。御主人様と一緒に生きます』

「つたく、我が儘な眷族だな」

『はい、吉朗様のたった一人の眷族ですから』

そのまま、下らないやり取りを少し続けていると、落ち着きを取り戻したティアは眠りについた。そのままの状態で眠ってしまった為、吉朗もそのままティアの為に、ティアの壊したベッドの代わりをする事になった。

第07話 家族（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第07話 家族

壱朗は目の前の状況を見無視し、ティアと自分達の血技について考える。

結局、ティアの姉の目論見は9割方成功した。ティアと壱朗は三千年の間、一緒にいたが、結局ティアの血技は完全に消える事はなく、『記憶をコピーする』というモノに落ち着いていたし、それ以上で成長する事もなかった。

ティアは知らなかった事だが、『帰属の儀式』は眷族側が行うだけでは『血技』は付与されない。眷族側が行う事で真祖による『記憶の結晶化』が可能になるだけだ。だからティアが旅立つ壱朗に儀式をした事で壱朗は幼いティアと初めて会った時にはすでに『記憶の結晶化』が可能だった。ただ出会った時のティア主は姉だった為、姉が死ぬまでは不可能だったが。

結局、ティアが生きた三千年の間に壱朗により背中中に六つの『魔血晶』が創られた。そしてこれからも増えるだろう。

真祖側の『帰属の儀式』は壱朗自身が恥かしがったので、ホテルの部屋で抱いた時にこっそり済ませておいた。おかげで抱いている途中から、壱朗の意識がダダ漏れになり、焦らしたり、反応を楽しんだりと苛めようとする意思がティアにバレて怒られた。素直に苛められてくれなかった為、壱朗は少し不満だった。

本当の意味で儀式が完了した為、ティアには壱朗の『時間跳躍』の血技が新たに付与された。ティアは壱朗が吸血鬼化した訳ではない。『帰属の儀式』により眷族となったただけなので、血のつながりは薄い。なので『時間跳躍』も大した効果はないだろう。

とりあえず、3時間後の自分宛てに手紙を跳躍ジャンプさせたりと、暇な時に微妙な訓練を行っている。

そして、吉朗が何故こんな事を考えているのかというと、今まさに吉朗は現実逃避の真つ最中だからである。

「あら、お母様。御夕飯のお買い物でしたら、私が購入ワタクシしました材料がもうすぐ届きますのでお待ち下さいな」

「あら。ティアちゃん。悪いねえ、そんな事まで気にしてくれなくてよかつたのに」

「いえいえ。これからは家族として過ごさせて頂くんですもの。今日ぐらいは私が全て用意させて頂きますわ。旦那様にも、御両親にも私の手料理を召し上がって頂きたいんです」

吉朗にとって、あまりにも現実味の無いやり取りが、目の前で交わされている。仕舞には爺さん婆さんまでが調子に乗りだした。

「ティアさん、ワシらも御一緒させてもらってえんかのお」

「あら、お爺様。もちろんですとも。旦那様からは、お婆様といつまでも睦まじいお二人で、大変幸せそうだとお話を伺っております。その秘訣を御食事をお召上がりになられながら教えて頂けますか？」

「ええ、構いませんよ。爺さんが浮気しそうになった時の話も、してあげましょうかねえ。ねえ、爺さん？」

「婆さん、それはもう許すと言ってくれてたじやろうが。今更、蒸し返さんでもええじやろに……」

吉朗は爺さん婆さんの態度の変化に、頭が痛くなってきた。

「……爺さんも婆さんも。年末までは、爺さん婆さんと呼ぶなと俺

に言っただけだったか？」

「そうじゃったかの？」

「『爺さんというのは曾爺さん100歳を超えたくらいの年齢の人を差すのだ！』とか『ワシらの事は民子さん敬三さんと呼びなさい！』って二人揃って言っただけじゃねえか！」

「吉朗ちゃんや、婆さん達ももう若くないんよ？ いつお迎えが来るか分からんけんね、今の内に『肩叩き券』と『肩揉み券』使っておこうかねえ」

「婆さん、俺はそんなもの作ってプレゼントした事なんか無いぞ。

親父の間違いだろつが。つーか、『けんね』ってどこの方言だよ！

ウチは三代前まで全員、大阪生まれの大阪育ちしか居ないって言うてただろうが！」

「吉朗や、優しい婆さんをそんなに苛めるもんじゃないぞ。

苛めはよく社会でも問題になるじゃろつが。苛めていいのは、自分の嫁さんを布団のな……………『バキッ』……………」

「……………婆さん、殴るのは良いが……………それはちよつと凶器が過ぎないか？」

「吉朗ちゃん、これはスチールバットに見えるだけのプラスチックのバットやけん大丈夫よ？」

「……………そうか。ならいい。部屋に戻るから飯メシができたら呼んでくれ」

そう言っただけ、吉朗は自分が生まれてから28年は過ごした家を、懐かしく感じながら二世帯住宅の二階へと、階段を上がり自分の部屋へと入って行った。

そこには、八千年前と変わらない部屋がそのままあり、寝正月を満喫しようとしていた為の用意もそのまま置いてあった。

「確か、煙草と酒を買いに出たんだよな」

西暦2100年1月2日に曾祖父が死亡し、吉朗は過去へと跳ん

だ。八千年かけて研究し、現段階の方法では過去は変えられない事は間違いない。

この時代にやっとたどり着いたが、葬式に出る事もしなかった。昔の知り合いに、吸血鬼になった事がばれるのが怖かった。

いや、友人に『化け物』という目で見られるのが怖かったのだ。家族にも知られなくなかったが、ティアに説得された。

家族が死んでからでは、伝えたいことも伝えられない、と。

この部屋に、まだ2箱も残っていた煙草に火を付ける。用心深い性格だったのだろう。だから、あと3箱しかないと考えて煙草を買いに行つた。今では何でも出来るようになったからか、『2箱も』なんて考えている。

この時代の煙草は軽い……軽過ぎて目にもしめない。泣くことすらできなくなつた吉朗自身の様だった。

姉貴と弟は葬式が終わつて、すぐに東京に帰つたらしい。仕事人間な二人らしい行動だ。

吉朗は明日から会社が始まるが、辞表を用意した。何らかの形で迷惑をかけるなら辞めた方がいいと判断していた。

ティアは交際している女性、という設定で上がり込んだ。親父が警察から戻り話が始まれば、それもすぐに嘘だとばれるが。

『お父様がお戻りになりました』とティアからの『テレパシー思念通話』が届く。『すぐに降りる』と返し、一階の居間へと向かう。

居間では大きな卓袱台が出され、ティアが一生懸命、地中海風の鍋物を作っていた。ティアには空気を読む、という期待はしない方がいいらしい……

「おかえり、親父」

「お前こそな、吉朗」

「さあさ、先にご飯を食べてしまいましょ。貴方もお腹すいたでしょ？」

「ああ。爺さんの焼酎出してくれるか。美津子」

「はいはい。それと、漬物よね」

そう言っただけで母さんが親父を促し、食事が始まる。コレがきつと、『彼方吉朗』が真祖になった時に、無くしてしまったはずの『日常』の一つだったのだろうか。

その後も吉朗とティア以外にとっては、曾爺さんが居ない事以外何も変わらない日常の風景のまま、酔っ払わない程度に全員が酒を飲み、吉朗とティアは全く酔う事が出来ない体だったが、食事が終わる。

ティアと母さんと婆さんが片付けの為に、台所で洗い物を始めた頃を見計らって、話を切り出した。

「親父、爺さん」

二人はやつとか、と言わんばかりにジロリとこちらを睨み、流石親子、そっくりだった。俺もそうなのだろうか。しかし、吉朗が話し始めるまでは、何も言わずにお互いのグラスに焼酎を入れ合っていた。

「俺は、吸血鬼になった。そして、ティアもそうだ」

台所では吉朗の母、美津子が食器を落としていたが、ティアが地面に落ちる前に掴んでおり、割れる音が響く事もなかった

「曾爺さんを殺した吸血鬼も捕まえて、閉じ込めてある。これから

復讐する為に」

「そう、か。だから、電話の後、すぐに帰って来なかったんだな……」

「ああ、帰りたかったけど、もう日常には戻れなかった。明日から会社が始まるけど辞表を出すつもりだ」

こういつ時の彼方家の人間は強い。医者から、曾爺さんの残りの寿命の話をされた時もそうだった。感情的で、無駄な事は聞かない。必要な事だけを話す。

「どうやって生きて行くんじゃ？ 当てはあんのか？」

「爺さん。当てはある、こう見えてティアはかなり長く生きてるんだ」

「一緒には、暮らせんのかい？」

「それができそうなら、今ここで話してない。って事だよな、吉朗」「すまない、婆さん。親父の言う通りだ」

吉朗の『血技』と現在の年齢については、話さない事に決めていた。

しかし、家を出る事は吉朗の中で既に決めており、ティアはかなり渋ったが、その為、家族を安心させる設定を考える事にした。

ティアが人類に友好的な吸血鬼としての地位があり、高齢経験がそれなりに豊富であるという事を話し、当面はティアに面倒を見てもらうという、男としては何とも情けない形にする事になっていた。そういう話にする許可を、ティアから貰うのには苦労した。

ティアは吉朗の家族に、高齢に見られるのが嫌なようで、吉朗は『不老なのに気にするのか？』と女心の分からない、ヘタレらしい事を考えていたが、散々話し合う事になった。

我慢してもらおう為の代償に、二人きりで南の島へバカンスに2週間も連れて行く事になり　ティアは、『それぐらい当たり前です。女にとつて、旦那様の御両親の印象というモノがどれだけ大事なのか分かっていません』と吉朗の居ない所で怒っていたが　吉朗は今後の予定の修正をする事になったのだった。

「親父、申し訳ないけど適当な時期になったら、警察に行つて、もう一度俺の行方不明届け出しておいてくれ」

「はあ。お前なあ。俺が今日、警察で何人の人に『人騒がせな』つて顔で見られたと思つてるんだ？」

警察や世間の間では、曾爺さんの仇打ちをすると家を飛び出した曾孫（28歳）は家族からの警察への連絡で行方不明扱いとなり、1週間経つた後、仇の吸血鬼が見つからず、無傷で帰ってきた。というヘタレなオチが付いていた。今日、吉朗の父親は、それを警察に報告に行っていたのである。

「悪いな」

「吉朗らしくない落ち着きっぷりだったから、何かあるは思つておつたがなあ。他に、わしらにできる事はないんかの？」

爺さんの好意は嬉しい。だが吸血鬼は弱肉強食、善悪の価値は力で決まる事が多い。人間のみんなには何もできないし、足を引つ張るだけだろう。

「……………」

何も言わない事で、その全てが伝わる。祖父は本当に曾祖父そっくりで、その辛そうな顔を隠す笑顔が、吉朗には辛かった。

「そうか……………」

爺さんの顔を見たせいでティアは、言いたい事をじっと我慢していたのが限界を超えたのだろう。ティアは自分は何も言うべきではないと、家に来る前に自分で言っていたのに反し、言葉一つ一つを模索するように話し始めた。

「吉朗様が、毎年、初詣にこの街の神社に来られる様に、私が、何とかします。ですから吉朗様の事を、お忘れにならないで下さい。私達は、皆様がお亡くなりになられても、その後も、きつと、ずっと、生き続けてしまい……『ティア、もう良い』……………はい……………」

「吉朗にはもつたいたい嫁さんだのう」

「若い頃の私みたいだと思いませんか？ 敬三さん」

「それを言うなら、この家に来たばかりの美津子にそっくりだよ」

「お前はいつまでたっても美津子さん離れがでんのう。お前がそんなだから、吉朗はティアちゃんを捕まえる前にバツイチなんかになるんじゃない」

「父さん、それは吉朗自身のせいでしょうが！」

吉朗はそんな祖父母に対し、『過去の事持ち出すなよ。後で、ティアの機嫌が悪くなったらどうしてくれる』などと考えていた。

「前の嫁さんはひどかったからのお。一回も民子さんって、呼んでくれなかったしねえ。吉朗ちゃん、ティアちゃんと仲良くの？」

「ティアさん。吉朗の事。よろしくおねがいします。毎年大晦日には、神社でお待ちしていますね」

「あ、はい。お義母様^{かあさま}」

何やら意味深な返事の仕方をしているティアを吉朗は努めて無視し、父親と向き合う。

「吉朗、いつ行くんだ」

「……………今晚中には、行くつもりだ」

「次は、年末か……………約束は、守れよ？」

「俺は『約束』しないぞ、親父」

「こんなにいい嫁さんを嘘付きにする気が？」

「……………努力はする」

母親とティアが共に傍にきていたので、吉朗は『まだ嫁じゃない』という言葉は呑み込んだ。『まだ』に反応されても、『嫁じゃない』に反応されても碌な事にはならないのは分かっている。

「お母さんもお父さんも、その……………吸血鬼の事はよく知らないけど、吉朗が苦労するっていう事は分かるわ。でも、何があっても吉朗は私達の息子よ？」

「わしらの孫じゃしの。のう、民子さん」

「そうじゃねえ。敬三さん」

『俺も彼方の家の子に生まれて良かったよ』とは口に出したら負けだと吉朗は思い、心の中で感謝だけしておいた。

「俺の息子だ。特に自慢できる所はなかったが、良い嫁さんを連れてきたのが良い男の証だ。……………行方不明にするんじゃないか、周りの誰にも自慢できないじゃないか。おい、吉朗。商店街の皆にティアさんを自慢してからじゃダメなのか？」

「アホな事言うな、親父。母さんと爺さん婆さんを見習って、カッコよく締めるよ。それじゃ俺の中の親父は、いつでもアホな親父じゃねえか」

「アホでいい。だから忘れるな。俺はお前の家族だ」父親

「姉貴と隆式への説明よろしくな。ちよつとは吸血鬼の事、調べてから話すかどうか決めてくれ」

「一美と隆式にも一度は会つとけ。後が煩いからな。……………そうだな四月になったら話す。それまでに会いに行け」

「分かったよ。ティアと必ず行つとく」

ティアも少し目が赤くなり初めていて、潮時かと考えたのだが。

「じゃ、日付が変わるまであと三時間はある。美津子、飲むぞ」

「いいのう、確か死んだ父さんの秘蔵の芋焼酎が出てきた筈じゃつたる？ あれも開けるぞ。民子さん、熱爛と冷はどつちがええ？」

「あらあ、どつちもいいですねえ、敬三さん、まずは熱爛にしましよつか」

「貴方、おつまみに漬物は全部出しちゃいますね。御歳暮の残りも何かあつたかしら……………」

「……………吉朗様？ お酒が無くなるまでは、出発できそうにないですね？」

「ああ、全くアホな家族だと、湿っぽくもなりやしないな」

「……………その割には嬉しそうです。……………『ティアちゃん一緒に飲むわよ』……………はあゝい！ お義母様。では旦那様。飲んできますね」吉朗様

「つたく……………」

その後、本当に酔いつぶれた母親と祖父母が居間で寝ている間に、寝たフリなのがバレバレな父親に礼を言い、ティアと共に家を出た。

「旦那様〜。素敵な家族でしたね〜」
「ティアの両親にちよつと似てたな」

呼び方については、明後日ぐらいまでは好きにさせてやるつもり
っている。

「はい、きつとこれから先も、あんな家族に出会いますよ。その時
に思い出すんです。私達の家族もそうだったって」

「そうだな」

「私達にも、家族はできると思えますか？」

「望めばなんだってできる………とは、言えないよな。力がある
と余計にできない事が分かってしまうもんな」

「そうですね〜でも！ いつか、旦那様の子供を産みます！」

「酔っ払ってるのか？ ティア」

「寄つてませんよ。吸血鬼は酔いません」

「だな」

力を手に入れると現実がより現実リアルになる。できる事が増えると、
できない事がはつきりと解つてしまう。嫌な話だった。

空の高さを知る為に鳥を超え、空の高さを知ったからこそ、宇宙ソラ
では生きていけない事を知った。そんな話を聞いた時、寿命が短い
生き物だからこそ、人間には愛が溢れ、希望に満ちているのだと思
った。

俺は俺の腕にしがみつきなながらも、笑顔で隣を歩いてくれるティ
アを、いつまで愛していただけるのだろうか。

「ずっと、一緒にいて下さいね。一緒に死んでくれる約束も忘れち
や嫌ですよ？」

ティアは気付いていたのかもしれない。
現代に二千歳以上の吸血鬼が居ない理由に。
そしてそれは、吉朗達にも適用されるのかもしれない事に。

「だから、『約束』したのか？」

「……何です？ 旦那様？」

「いや、何でもない。『約束』は守る。ティアとの南バカンスの島の『約束』もな」

「はい！ きつとですよ」

そうやって支え合いながら、ティアと吉朗は闇夜の道を歩いていく。まるで、人間が支えあって生きていくかのようだ。

第08話 お披露目(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第08話 お披露目

ティアは門の前に礼儀正しく立っており、次々と来る入場者を捌いていた。

ティアの後ろには扉が幾つも並んでおり、扉と扉の間には日巫女ひみこの眷属がそれぞれ立って、ティアと同じ様に案内をしている。

「ヨーロッパ方面の血族の方は、AからEの扉へとお願ひ致します。えと、アジアの方ですか？ ならHからKの扉へとお向かい下さい」「ティアさん、三世の方が『四世以降と一緒に馬鹿にしているのか』って怒ってます〜！」

手伝いをしてきている、日巫女ひみこの眷属である壹与いちよが泣きそうな声で走り寄ってくる。

「壹与さん、またですか？ とりあえず、有無を言わせず扉の中へと放り込んで下さい。そうすれば、彼方様の『結界』のせいでおとなしく座る以外、行動出来ないはずですよ」

「それが、扉の中に入る前に、文句を言い始められまして〜」

壹与いちよは三世だが日巫女ひみこと同じく、二千年近く生きており、背中の『魔血晶』も既に三つ付いている。故に、その辺の三世や、四世以降に遅れを取るはずが無いのだが、いかんせん気が弱い為、強気に出られるとついつい萎縮してしまい、ティアに泣きついて来るのである。

お陰でティアの立っている後、一際大きな扉の前には吸血鬼が十人程、正座させられている。全て、壹与いちよに因縁をつけ文句を言って、ティアにお仕置きされた二世と三世だった。

「それは分かってはいるんですけど、何故か皆さん怒るんです」
ティアは壹与を見て、何度目になるかわからない溜め息を吐いた。
壹与の外見の事を考えて、『これでは仕方ないのかもしれないかも。でも、
またお仕置きしますか』と思いつながら壹与に指示を出す。

「とりあえず、文句を言う輩は真祖でないかぎり、全てこちらへ回
して下さい。真祖の方々が一般門に来る事は無いと思いますが、誤
って来られた場合は、直ぐに『念符』で連絡を。御迎えに上がりま
すので。宜しいですね？」

「はい、解りました」

壹与は間延びした話し方のまま 本人的にはシャキツとしたつ
もりの 返事をし、ポニーテールに纏められた綺麗な黒髪を揺ら
しながら担当の扉へと戻って行く。ティアには歩き方までフラフラ
しているように見えるのだが、本人は至って真面目に、真つ直ぐに
歩いているつもりらしい。

日巫女の血族は全員、日本人らしい黒髪だ。それが血族の条件な
のかと聞きたくなるぐらい、黒髪の者しかいない。そして何故か十
代に近い容姿の者が多い。日巫女本人は『年齢不詳の京美人』と
いった出で立ちなのだ。

ティアは、その後ろ姿に『日巫女様も変わった趣味の方なのね』
と思いつながら、入場者が疎らになつてきた事を感じ、正座している
面々に話しかける。

「さて。『結界』を解きますが、大人しく座席へ向かえますね？」

既に戦意喪失どころか、とにかくこの場から離れたいと考え始め
ていた二世や三世の面々は、ティアを怒らせない様に、ただ黙って
首を縦に振っていた。

「では。……………解！ これで動ける筈です。問題を起こさないで下さいね」

やっと解放された面々は、とにかく逃げる様に己に指示されてた扉へと入って行く。この時正座させられた面々が、『吸血鬼社会に変革をもたらす存在』としての吉朗の、力の誇示に一役買い、広告塔になり得る存在だった。

ティアを含め、扉の前で案内と雑務を担当している数名は皆一様に、背中の大きく空いた衣装で行っている。

ティアは純白のイブニングドレス。壹いよ与を含め、日巫女の眷族である八人の男女は、袴が男女色違いの巫女服だった。何故、背中を大きく露出させているかということ、簡単にいえば身分が解る様にある。

五百年以上生きた者
力のある吸血鬼は背中に『魔血晶』が付いている。

その色と数が、ほぼそのまま力の格差となる。

色は、真祖なら『黒』。二世は『青』。三世は『赤』。四世以降は三原色の『黄色』に近い、明るい色をしている。

数は基本的に正多角形の呼び名で呼ばれる。

五つ持ちは『ペンタゴン』Pentagon、六つは『ヘキサゴン』Hexagon、七つで『セプタゴン』Septagon。

何故、多角形の呼び名で呼ばれるかというと、『魔血晶』を創る、つまり『記憶の結晶化』の際には、自然とその力に合わせた魔法陣が浮かび上がる。また、全力で力行使する際にも背中に、魔血晶を基点とした同じ色の魔法陣が浮かび上がるのである。この魔法陣

は自分では見えない為、真祖か他の吸血鬼の『記憶の結晶化』を見た事がある者しか実物を知らない。強大な力を持つ吸血鬼の、全力での戦闘を見た事がある者達も知っている。生き残っていれば、だが。

しかし、そんな呼び方をするのは三世以上の者が多い。

何故なら四世以降の者で、千年を超えて四ツ星『テトラゴン』^{Tetraagon}になる事は、あまりにも珍しい事なのである。故にまだ若い吸血鬼や四世以降の世代は、単純な言い方で『モノゴン』^{Monogon}を一ツ星、『ディゴン』^{Digon}を二ツ星、『トライゴン』^{Trigon}を三ツ星などと称する場合が多い。

伝統や格式を重視する事のない、下位の吸血鬼社会の中ですら禁忌^{タブ}となつているのが五芒星^{Pentagram}（ペンタグラム）や六芒星^{Hexagram}（ヘキサグラム）を意味する呼び名だ。

ティアは六つ持ちの『ヘキサゴン』^{Hexagon}であるがその背に現れる魔法陣の様子は六芒星ではなく、雪華模様^{Hexagram}に似た。 吉朗が長生きとかけて『万年生きる亀模様』と言ったら殴られた。 六角形模様である。

五芒星^{Pentagram}（ペンタグラム）や六芒星^{Hexagram}（ヘキサグラム）は吸血鬼に對抗しうる、教会所属の魔法使いや魔術師、日本の陰陽師や中国の符術師などが行使する力に現れる魔法陣である為、吸血鬼からは忌み嫌われている。

吉朗やティアはそんな事とは関係なく、技術として符術や陰陽術果ては魔術まで世界各地の魔力で使用できる術を色々と収集している。

そんなティアでも、姉妹共に教会の人間に迫害された記憶があるからか、五芒星や六芒星には忌避感を隠さない事が多い。

吉朗からすればどんな技術を使つてでも、自分の血技の謎を解明しなければいけなかつたし、なにより娯楽。 小説や漫画、アニメ

など　の中に魔術師や符術師など山ほど出てくる時代に生まれた為、恰好良いなどと評しており、その様な事は吸血鬼が口にすべきではないと、ティアによく怒られていた。

今、この正面の大扉を管理しているのは、背中に『蒼青のBlue He 角魔血晶Xagon』を背負ったティアだ。

この大扉は『真祖』専用。世界に十四人いると言われる真祖の内、既に十人が中にいる。

扉は一度も開けていない。

だが真祖なのだ、それぐらいの事はやってのけるのが当たり前だ。例え、この会議場が吉朗の全力の『結界』により『扉』以外からの、入退場や破壊が出来ない様にされていたとしても。

愚か者達を全員解放したティアは、外から見えない様にお腹に貼った『符』を剥がす為にドレスの中に手を入れる。

吉朗の指示の通り、『血の力血の熟成』を誤魔化す『符』を貼ってワザと愚か者を集めるのは、もう十分な筈だった。

「おい、何故三世たる私が四世とも等と、同じ区画に入らねばならんのだ」

壹与いよの処で文句を言っていたという愚か者三だろ。近づいて来ているのは目の端に映っていたので知っていたが、名乗りもせずいきなり言う事がこれとは。ちょうど『符』を剥がそうとした時に話しかけてきたので、まだティアの魔力血の力には気づいて居なかった様だ。剥がしてから姿勢を直し、答える。たとえ、格下相手だろつと吉朗の着族として守るべき作法は守る。礼儀まで守ってやるつもりは無いようだが。

「我が主たる真祖様の意向です。貴方はどちらの方ですか？ 力ある者として振る舞いたいのなら、上位者への礼儀作法ぐらいは、守りなさい」

まるで子供を叱る教育者のように振舞われ、中世の貴族の格好をした、三世の吸血鬼は頭に血を昇らせたが、ティアがそれを許す筈もなく、さらに畳み掛ける。

「壹与殿は日巫女様の眷族たる『Red Trigon』です。その彼女に無茶を言ったと聞いておりますが、『魔血晶』すら持ちえぬ貴方程度の何を持って我々の手を煩わせるのです？ 格下は格下らしく言う事を聞いていればいいのです」

三世の男は、突き付けられる上位者からの宣告に身動きが出来なくなつた。

「言葉も返せないとは。一体、どのような教育を二世から受けているのですか？ 三世の教育も出来ない二世が居るといふ事ですか。同じ二世として、嘆かわしい事この上ありませんね。話があるのなら、お前の親たる二世を連れて来なさい」

ティアは男に背を向け、此方に近づいて来る別の二世 恐らく『デイゴン』だろうと一瞬で判断し、に、扉の場所の案内をする為に、小走りで向かう。

その場に取り残された三世は、急に大きくなつたティアの魔力に絶句し、走り去る背中の『Blue Hexagon』まで見てしまつては更に文句をいふ事も出来ず、ただ来た道に戻って自分に相応しい扉へと入るのだった。

「そろそろ時間ですね」

ティアは腕の発条式時計を 南の島で 吉朗に買わせた 骨董品のお気に入りだ 確認してから、壹与いよの元へと向かう。

「壹与いよさん。全員に中に入るように連絡を。これから五分後、『封鎖結界』を予定通りに発動します」
「もうそんな時間ですか、解りました」

これから吉朗による、吸血鬼社会全体に対する挑戦が始まる。ティアはその宣誓式展会場ともいえる、場所の維持を任された。日巫女や壹与いよ達にすら、『封鎖結界』だと教えているこの建物の結界は、吉朗の八千年に及ぶ研究と知識を使用した『時空間捕縛結界』だ。しかし、それを維持しているのはティアの魔力だ。

あとは、予定時刻に來なかつた者に関しては、入れるつもりは無いし、真祖が來ていない場合はこの会合後、吉朗が直々に出向くと言っていたので放置で良い。

とは言つても、冬眠中では來れない二人の真祖を除けば、來ていないのは二人だけだ。

そして、刻一刻と時を刻む骨董品アンティークの発条式時計 吸血鬼は魔力で水晶の振動に影響を与えてしまう為、水晶振動子時計クォーツは使えないを見つめながら、『時』と『吉朗の言葉』を待つ。

ティア、時間だ。始めよう。

血族間通話 吉朗の聲がティアの頭に響く。それを聞いたティアは、その大扉

の内側に入った後、『時空間捕縛結界』発動の為の最後の一枚の『符』を扉に貼る。

他の全ての扉では、すで日巫女の眷属が同じ様に貼ってくれている。

結界に穴が無いか確認した後、ティアは壇上付近へと向かう。

会議場はすり鉢状の形をしており、北側のスクリーンを中心に周囲270度の観客席がある。壇上には普段は置いてある演説台はなく、その中央には四人掛けのテーブルセットが一揃いとその左右に五個ずつ、計十個のサイドテーブル付きの豪華なソファがあり、既に十人の吸血鬼が着席していた。

中央には三人が、左側は五人埋まっており、右側には二人しか座っていない。しかし、中央にいる日巫女ひまこはこれで全員と判断すると、席を立ち客席に向かって話し始めた。

中央にいる真祖を取り囲むように、一階部分の客席にまばらに座る二世達　およそ五十人程　は一様に起立し、日巫女に向かい頭を下げる

「諸兄らの参集、誠に嬉しく想います。此度の参集は異例のモノですさかいに、すぐに終わらせませすよって、御静聴お願い申し上げます」

京言葉のイントネーションや雰囲気、日本人以外の吸血鬼に理解できるはずもないが、真祖たる日巫女が丁寧な挨拶をしているというのは、会議場にいる全ての者に伝わっただろう。日巫女は『言の葉は伝わりやしあせんでしょねえ』などと考えていたが、実は日巫女の熱狂的フヤン信望者はかなり多く、この場にいる七割近い者が日本語を習得している。だが、観客席の吸血鬼達はお互いにそれを隠しており、完璧には理解できずともある程度は理解し、感動に打ち震

えていたのは本人達にしか分からない事実であった。

そんな彼らの心の内はさておき、これ以降、この場にいる真祖以外の吸血鬼は単なる傍観者か、声を出す事も許されない観客にすぎない。

「それでは、日巫女殿が我らを呼んだ理由を教えてくださいませんか？」

中央に座ることの許された『酋長』と呼ばれるアメリカ先住民ネイティブアメリカンの古き装束を身に纏った千二百歳の真祖が問う。

「いくら最高の『血の熟成』年齢を誇る日巫女殿とは言え、いささか性急な呼びではあったのお」

同じく中央に座る『春の女王』クワロウディアも早く理由を知りたかつたのであろう。彼女は日巫女とたった式百年しか変わらない、千八百歳だった。血技が日巫女のモノよりも戦闘向きである分、戦闘能力は『春の女王』クワロウディアの方が上で、日巫女に強く出る事の出来る真祖の一人だった。

「そうですね、ではきちんとは紹介させてもらいまひよか。我らが日本にお生まれにならなはった新しき真祖どす。二千百年を迎えた翌日に真祖にならなはったばかりやよつて。まだ生れて四ヶ月という所どすなあ。

では、彼方様こちらに………」

その瞬間、特に日巫女をよく知る、真祖達は皆一様に驚きのあまり、腰を上げそうになった。日巫女が敬称で呼ぶ相手が居ると言う事に。

そして、スクリーンの手前に『ゲート』ゲートが出現したかと思うと、日本

人らしい黒髪黒眼で、真っ黒の礼儀服に身を包んだ吉朗が姿を現す。その姿を見た真祖達は、日巫女が何をしようとしているのか、意味が全くわからなかった。たった一人、ラマルティーヌ卿を除いては。

「さあ、このお方が我らが日本の真祖、彼方様です。よしなに。では……」

「日巫女どの、待たれよ。理由を先に申せ、妾を呼び付けた理由が、ただの真祖の紹介というのではあるまいな？」

言葉どおりの意味ではない。吉朗を中央のテーブルに座らせようとする日巫女に『春の女王』が説明を求めているのである。そこに吉朗が口を挟む。

「だから言っただろうが、日巫女。こんな茶番よりも、とっとと本題に入るべきだってな」

「へえ、せやかて。彼方様、真祖の挨拶でゆうんは、いつもこうしてやってはったんどすえ？」

「そうなのか？」

「そこなラマルティーヌはんが抱え込まはった、14番目の娘はんも百歳超えはったら、プルケラはんの後見してもらって、お披露目する予定やったんやさかい……」

そこに『春の女王』が割って入る。

「待たんかぬしら！ 何を妾抜きで話をしておるか！ 大体なんじや、たかがなりたて真祖の分際で日巫女を呼び捨てか。日巫女も落ちたもんじゃのう。ついでにプルケラと姓を呼ぶな！」

「春はん、そないに目くじら立てんでもええんちやいますのん？」

春はんとは違つて『酋長』はんは解らはったみたいやけどなあ？」

吉郎が『酋長』の方に振り向くと、『酋長』は椅子から下り床に跪いて吉郎の手を取ろうとしている所だった。それを見て苛立たしげに爪をかじる男を横目に、ラマルティーヌ卿が声を上げる。

「日巫女様も彼方様も戯れはおやめ下さい。『酋長』殿も分かっっておられるのならば、御遊びを辞めて頂けるように、仰ってくださいませんか？」

普段のラマルティーヌ卿とは違う場をわきまえた態度に、隣で爪を噛んでいたウィルソン卿は業を煮やし口を挟む。

「貴様まで何だというのだ。『酋長』殿。貴方も我がアメリカ合衆国の誇る真祖ならば、その様な生りたてに跪くなど、お止めになつてはいかがか？」

「黙れ、戦好きのガキが。このお方の事が分からん程度の者に、会話に入る資格などないのじゃ。黙って金の勘定でもやっておれ」

アメリカの抱える真祖同士の不仲は有名だったが、これでは話が進まない、ラマルティーヌ卿は吉郎に声をかける。

「彼方様、『結界』をお解き下さい。話が前に進みませんので」

訝しげな目で吉郎を見る『春の女王』と、その他の真祖の視線に晒された吉郎に日巫女は視線と仕草で『御随意に』を促す。それを受け、日巫女の悪戯に付き合うのは止め、吉郎は結界を解く。

背中を逆撫でされた後、首を掴まれ深海の底へと引きずり込まれる感覚。

実際には深海に潜った事のある吸血鬼等あまりいないので、感覚的なものでしかないが

全ての吸血鬼が同じ感想を抱いた。

格が、いや住んでいる世界が違う、と

その場で行動できたのは、やはり『血血の力の熟成』のお陰か、日巫女唯一人だった。ティアですら全ての『結界』を解除した吉朗を、目の当たりにするのは初めてだった。

「もう一回ちゃんと、紹介させてもらいまひよか。」

我らウチが日本にお生まれにならばった新しき真祖の彼方様どす。二千百年を迎えた翌日に真祖にならばったばかりやよつて。まだ生れて四ヶ月という所どすなあ。

あ、後。ウチの旦那はんやさかいに、誰も手え出したらあきまへんえ？」

日巫女はその血技である『予知』と飄々としてはいるが、あまり話さず、話す時には重要な事ばかりを言う普段の行動から、吸血鬼の中でもその言葉には信用がある方だったが、この時ばかりは誰も日巫女の言葉を信用しなかった。

日巫女の最後の言葉に納得のいかない吉朗の唯一の眷族は、『約束』がある為、今日までは京都日巫女が住んでいるにある神社に滞在しなければいけないが、明日以降の寝床の場所は『京都からは離す』と心に決めたのだった。

第08話 お披露目（後書き）

感想や評価を頂けますと作者が大変喜びます。
何卒よろしくお願いします。

実はこちらの執筆は『義賊と貴族がメイドと主』
というノの合間のお遊びとして書き始めました。
お怒りはあるかもしれませんが、あちらにも一読の価値が……
ないかもしれません。
それでもよろしければあちらもご一読下さい。

第09話 会合（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第09話 会合

ティアの後ろで成り行きを見守っている日巫女の眷族の二世達は、ティアの滑らかで男なら誰でも触りたくなるような綺麗な背中を、色んな意味で見続けていた。

普段は日巫女から遠ざけられている程、欲望に忠実な部類の彼らも、今回ばかりは目の前の背中に欲情を抱いたりはしなかった。

何故なら、壇上で『本気の吉朗』が放つ魔力血の力に圧倒されていたし、何より、ティアの背中に『Blue Hexagon』の魔方陣が肌に浮かび上がっていたからである。

ほんの先程まで、一緒に案内をしていたティアを初めて見た時の彼らは、その外見と放つ魔力の美しさに見惚れ、内心欲情していた。

だが、ティアを怒らせる愚か者が次々現れ、『Blue Hexagon』の魔方陣が肌に浮かび上がる度に、叩きのめされ正座させられている人数が増えていくのを見てからは、『この背中は自爆スイツチだ。触れたら死ぬ』と認識していた。

文句を言いつつ、馴れ馴れしくもティアの肌に触れようとした愚か者が、ティアの『御主人様以外の方に触れる事を許す程、安い肌ではありません』という言葉と共に、地面に肩まで埋められた馬鹿と同じ末路をたどるのはご免だった。

そんなティアが何故か今も『Blue Hexagon』の魔方陣が肌に浮かび上がせ真祖達の方をじっと見つめている。

二世だが日巫女と暮らしていない彼らは、あまりの恐ろしさに吸血鬼の誇りも忘れ、早くこの場から解放されたいと心の中でずっと祈っていた。もちろん、吸血鬼は神になど祈らないので、祈る相手は自分の主だ。彼らが普段の日巫女を知っていれば、間違っても彼女に祈ったりはしなかったが。

「おい、日巫女。旦那さんってのはなんだ。俺の可愛い着族テイアが怒るから、下らない冗談はやめろ」

「あきまへんかあ？ なら、お妾めかけでもよろしおすえ？」

二世
一階席の一部では、吉朗の発言と共に魔力が減少し、日巫女の発言の後、倍以上に膨れ上がる。

日巫女が吉朗テイアの着族をからかっているのは、日巫女の着族には一目瞭然だった。

そして最も吉朗の圧力に晒されている壇上では『血血の力の熟成』の強い順に、行動できるようになっていき、言葉を発し始める。

「して、日巫女殿。本当の所、そちらの御方は何年もの間、どちらで眠っておられた御方なのじゃ？ 妾わいわもきちんと挨拶すべきだと思っうのじゃが」

先程までとは打って変わり、額に汗を流し無礼にならぬように話しかけようとする『クロウテイア・ブルケラ春の女王』は、日巫女の目には面白い玩具に見えるのか、意地の悪い笑顔で答える。

「春はん、そないな事言わはっても、ウチは嘘なんか吐いてやしまへんえ？ それにいまさら丁寧丁寧に口調を戻さはっても、手遅れやと思いますすえ？ 春はん、先刻迄はええと…… 『たかがなりたてのヘタレでやすけない真祖真祖の分際』とか言わはったやおまへんか。いくら旦那はんが気の優しい御方御方やいっても、限度ちゅうもんがありますえ？」

「それぐらいにしてやれよ……」

「あら、旦那はんはウチよりも春はんの方が好みですのん？ ウチのベベ着物と違ちがうて春はんのは安ちかもんですえ？ わからんように底上げ

たはるけど、旦那はんが満足できる程の大きさやおまへんし、それに髪もウチを真似て染めたはりますけど、ホンマは赤毛なんどすえ」

日巫女は肩や、その深い胸元が大きく開いた着物を見せつける様に、吉朗に擦り寄りつつも流し目で、凹凸には貧相だ乏しいが桜の模様が美しい着物を、きつちりと着こなし、染めているとは思えない黒髪を持つ「クロウティア・ブルケラ春の女王」を見て、挑発する。

「〜っ！ 貧相と言うな〜っ！ しかも捏造するな！ 『ヘタレ』と『やすけない』は言つてない！ とうるか『やすけない』って何だ！」

「はいはい、お嬢ちゃんも挑発に乗るな。『やすけない』は品がないって意味だ。それと日巫女、俺は外見にも着てるもんにも興味はない。傍に置く着族は理屈では選んでないからな。お前も傍に置くつもりはないぞ？」

「旦那はんのけちしぶちん！ ティアちゃんついでにがけなるいわあ………」

クロウティア椅子に座り、泣き崩れたフリをする日巫女を無視し、吉朗は「クロウティア春の女王」に話しかける。

「お嬢ちゃん。俺は此処には挨拶に來ただけだ。それに自分の四分の一も生きてない、小娘が何をゴチャゴチャ言つて様が全く気にしてない。だからお嬢ちゃんも気にするな、安心してろ」

「つー！」

クロウティア「春の女王」にとって、それはそれで問題だった。

日巫女に次ぎ千八百年を生きる真祖である妾わらわが、小娘扱いわらわされている。しかも今、この真祖は四分の一と言つた。つまり妾の4倍七千二百年を生きているという事になる。確かにこの圧力はそれぐらひはありそうだが、それは一体何だ？ 本当に吸血鬼と言う存在

か？

などと『クロウディア春の女王』が考えている間に、『酋長』が話に加わり始めていた。

「大いなる力をお持ちの真祖様。お久しぶりでございますのう。あの時はお名前をお伺い出来ませんでした。此度はお名前を知るお許しを頂けるので？」

「やっぱ、爺さんには解つちまうか。名乗るかどうかはまた後でな。近々酒でも飲もう。爺さんと一緒に、かなり度数の高いきついヤツでなら酔えるかもしれん。狼達のその後も聞きたいしな」

「うう、泣き崩れるウチを袖そでにして、『じじい』爺と話に華咲かすやなんて……旦那はんのいけず。ウチが行かず後家になったのは、旦那はんのせいやのに……」

「酷い言いがかりだな。俺のテイア眷族が、お前の眷族を圧迫死させかねないから、そういう冗談はやめとけ」

普段なら、真祖の中で最も我が儘な『クロウディア春の女王』が真面目な顔で話を進めようとした。

「彼方様。『挨拶』というのはどの様な？　むしろ来いと言わしめる事すら可能かと思われませんが？」

「ふむ、思ったより頭が良い様だな。流石に真祖なだけあるか。よし、とつとと用事を済ませて、爺さんと眷族テイアで酒盛りするかな」

そう言いきると吉朗は、継りつこうとする日巫女をやんわりと椅子に戻し、他の真祖達を視線で撫でる様に一瞥すると犬歯が見える程、口を歪ませて笑った。

「改めて自己紹介だ。俺は『彼方』。名は俺に従う者にしか許す気はない。生れたのは日巫女の言った通り、西暦2100年1月2日

深夜。3日になってたかもしれん。が、どうでもいいか。おかしいと言われる前にさっさと誤解を解いておこうか。
俺の『アベリリテイ血族技能』は『時間跳躍』だ」

その言葉に、既に身動きができる様になってはいたが、事態を静観していた真祖達が腰を上げる。しかし、吉朗は真祖達を再度一瞥する事で、座らせ話を続ける。

「詳しい事まで話すつもりはないが、俺は時間を何度か跳び、通算で八千年近く生きている。これが証拠だ」

吉朗は儀礼服の上着を日巫女に投げ、うす受け取った上着に顔を埋めて悶えている日巫女と危険な眼差しのティアを務めて無視し振り向いて、白いシャツの背中の部分が空いている為に、むき出しの背中を見せる。

そこには合計十六個の『魔血晶』と上下二つの八角魔法陣が重なる様に描かれていた

二世の誰かぼつりとつぶやく。

「『漆黒のBlack Octagon』……」

「それも二重にあるぞ……」

そこに更に吉朗は話を続ける。

「俺に従え、とは言わん。だが覚えておけ。俺は今日より、むやみに人間の命を奪う吸血鬼を許さない。そして、生れたての真祖のを幽閉し、魔力を強化する為の餌とした者は必ず滅ぼす。生れた真祖

「が心から、それを望めば止めはしないがな。本当に望めば、な」

「旦那はんは甘いどすなあ」

「悪いか？」

「いいええ。ウチ、本気で惚れそうやわ」

「それはいらん」

「いけずう……」

「……冗談はさておき、俺の『血技』に疑問を持っている輩もいるだろう。そんな現実を見れないアホどもの為に、用意した趣向がある。ティアア！」

ティアアは前もって言われていた通り、画面以外には『結界符』が山ほど張られたテレビを持つてくる。

「さて見えるか？ まあ、見えないヤツはいないだろうが。この画面に映っているのが今現在のこの会議場以外の場所の映像だ」

画面の中にはこの会議場の外の様子が映っており、時間に間に合わなかった吸血鬼等がせわしなく歩き回っている。

「こいつらに落ち着きが無い訳じゃないぞ。目と頭の良い奴は気付いただろうが、今、『この会議場は未来に向かって跳んでいる』中の俺達を含めてな。そして、もうすぐ到着する。この中にお前等全員が入ってから『3日後の未来』へな」

そこで比較的若い吸血鬼達、特に1900年台に生れている者達は気付いた。この会議場が未来に飛ばされているという事は外と中とで時間の流れる速さが違う。この中に入ってまだ一時間も経っていない。一時間が3日になる。およそ72倍の速度で外の時間が流れる事になると。

「さて、『^{五次元}時空間捕縛結界』で俺達の存在を守っているが、この会議場自体は守っていない。3日後に飛ばされた会議場は、3日後の未来で2つ存在するのか？ できるのか？ その結果もお見せできるだろう。お前達には傷一つ付かん事は保証しておいてやる。安心しろ。後15分だ。到着までな」

そう言うと中央のテーブルにテレビを置き、正面のスクリーンに『^{ゲート}門』用の符を張り、ティアを連れ『^{ゲート}門』へ向かう。

「俺に従う者は自分の意思で挨拶に來い。來ない者は中立だろうが、何だろうが全部敵だ。中立を保ちたいならそれを言い來い。安心しろ、期限は決めん。挨拶に來ればその瞬間からは保護対象。來るまでは何が起ころうが助けないし、敵対すれば殺す。この会議場がその結末を教えてくださいるだろうよ」

「旦那はん、ウチを置いていく気？」

符術で会議場の外へと出ようとしている吉朗に、それに気付いていた日巫女がしな垂れかかる。

「いいのか？ 着族が困った顔してるぞ？」

「ええのええの。たまには着族から離れて、ゆっくりしたいし」

壹与^{しよ}を筆頭に日巫女の着族は、『逃げられたら、数十年は見つけられない！』などと頭を抱えていたが、跳び込む訳にもいかないの^でただ困り果てていた。そんな事はお構いなしに、真祖達は自由に動く。

「さて、行くが。おい、アンドレ。ミーシャはどうしたいと言った。ちゃんとしたんだろうな？」

「も、もちろんです。彼方様と共に行きたいそうです。はい！」

ミーシャとは、まだ生れて八十年ほどの14番目の真祖だった。ラマルティーヌ卿が自身の眷族に見つけさせ、その血を楽しむ為に飼殺しにしていたのだが、一ヶ月程前に壱朗達に城に殴り込まれ、ミーシャの好きにさせる様に約束させられた。

おかげでラマルティーヌ卿が、やつとの思いでルーヴル美術館の本物とすり替えた絵画の点数がティアに燃やされ、ラマルティーヌ卿は大事なコレクションを守る為に、壱朗には逆らわない事を決めていた。

そして壱朗がミーシャと呼ばれた真祖に目を向けると、ミーシャは『ビクッ』と一度肩を震わせた。ミーシャにしてみれば何故壱朗が、自分に優しくしてくれるのか解らなかった。

だから、会合の後は好きなようにさせてやると言われた時も、どうせ嘘で、会合が終わればまた元通りの生活だと思っていた。壱朗が本気を出すまでは。

そして今。話が本当だと分かり、ミーシャはおずおずと口を開いた。

「もう、おじさん達に噛まれたりしない？」

「ああ。誰にもさせん。だからお前も人間を噛むなよ？」

「がんばる。一緒に連れてってくれる？」

「よし。じゃあこい」

「うん！」

ミーシャは八歳で吸血鬼になった、その瞬間から無意識に『老化』を発動し、それ以降は全く変わっていないかった。そしてミーシャはその外見通り、子供らしい笑顔で壱朗に駆け寄ると壱朗の首に飛びつき、甘え出す。

「我が儘言っている？」

「内容によるな。何でも言っていいいわけじゃないぞ？」
「パパって呼んでいい？」

その瞬間、日巫女とティアは凍りつき、吉朗よりも圧力があるのではないかと思う様な暗いオーラを背負いミーシャへと目を向ける。

「怖いお姉さん達が　内心では鬼婆だと思っただが空気を読んで言わなかった　睨んでいるからそれは止めた方が良いんじゃないかな？」

「駄目なの？　お姉さん達？　日巫女ママとティアママって呼んじやダメ？」

雷が走った様に体を震わせた二人は、吉朗に抱えられ首に抱きついていてるミーシャを奪い、我先にとミーシャを抱きしめ許可を出す。

「ええ、ミーシャちゃん。かましまへんえ。旦那はんはパパ。ウチはママ。それでよろしおすえ。そこにいる眷族の事は鬼ババアでかましまへんで？」

「ちよつと、日巫女様。そんなに力を入れたらミーシャちゃん死んじゃいます。どうせ子育てもした事ない様な行かず後家なんですから、無茶は止めて下さい。」

……オホン。ミーシャちゃん。長年、彼方様と連れ添った私が、ママとしてパパの事も色々教えてあげますからね。その行かず後家は『オバサン』とでも呼んであげてね。」

吉朗は女達のそんなやり取りを無視し、主に自分の精神衛生上の為に　それを見守る『酋長』に声をかける。

「爺さん、後で会いに来てくれるか。アンタのトコの白豚合衆国　ウイリントンには興味はないがアンタとはやり合いたくないからな」

「分かり申した。儂は此処に残ってお力の一端を、拝見させて頂いた後、日を改めて真祖でも酔える酒を持ってお伺いするとしますかの」
「彼方殿！ 妾は、その……」
「クロウディア、だったか？ 今は自分の血族の事に集中しろ。気になる事があるんなら探しに來い。一年は日本を出るつもりが無いからな」

そう言葉をかけたあと『門』^{ゲート}の方へ向き直ると、右手を日巫女と、左手をティアを繋いだミーシャが明るく笑っており、なんとなく満たされた気分になった吉朗は、笑顔で三人と共に『門』^{ゲート}をくぐった。

『漆黒の 重積 八角魔血晶』
『Black Twice Octagon』それが『春の女王』と『酋長』が名付けた、吉朗の本気の『血の熟成』の呼び名だった。

吉朗達が立ち去ってから、吸血鬼達は瓦礫の山の中で己らの主たる真祖が動くのを待っていた。その中でも最初に動いたのは、灰色のイタリア製のスーツに身を包んだ、ウィルソン卿だった。

「この力、素晴らしい！ 研究し、解明すれば不可能はなくなる！ どうです、皆さん。真祖全員で協力し、あの彼方という真祖を捕えるのです。そうすれば我々にもさらなる力が手に入りますよ！」

ウィルソン卿の熱のこもった台詞に、賛同の眼差しを向けた真祖

は一人もいなかった。しかし、真祖は賛同していなかったが、二世、三世やそれ以下の者達の中にはその考えに賛同する者達が、かなり居そうだった。

「阿呆か貴様。今のこの惨状を見る。手を出せば、我らすら死に絶えるわ。よく見てみる。残っているのは守られておった我々と、床などだけじゃ。外壁、外装、屋根。何処に行つたと思う？ 同じように消滅したいのか？」

「ウイルソン、お前が儂を騙して研究した『重力』の研究、その研究過程で生み出した副産物の様な紛い物をもつと増やす気かの？」

『クローディア』
「春の女王」と『酋長』に駄目出しされ、その怒りの圧力に何も言えないウイルソン卿ではあったが、戦闘向きではない日巫女と今^{年を経ていない}はまだ幼いミーシャ^{14番目}を人質にすれば、どうにかならないものかと頭の中で計画を考え始めていた。

『クローディア』
「どちらにしろ、『春の女王』様と『酋長』様はあちらにつくのでしよう？ ボクは自分の目で彼を見定めてからにするよ。格上に対しては失礼かもしれないけれど、このスタンスだけは崩せないね」

そう言つて、埃まみれになつたソファから優雅に立ちあがった金髪碧眼の男は、その場に残る全ての者の目の前から、何の予兆も痕跡もなく消え去つた。

「私は挨拶を済ませてから、帰らせてもらいますよ。これ以上コレクションを燃やされては敵わない。彼方様云々の話はともかく、あのティアという眷族には、城に近寄つて貰いたくないのでね」

そう言い、ラマルティーヌ卿は自分の眷族に指示を出し、撤収を始めた。その横ですつと何かを考えていた、チャイナドレスに身を

包んだ真祖の一人が、この場で最も力のある二人に対し、提案を持ちかける為に話し始める。

「クローディア『春の女王』様と『酋長』様は黒髪魔神というお話を聞いた事がありますか？」

その提案が、誰の為に、何の為にされたのかは、今の段階ではまだ誰にも解らないのだった……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1259y/>

吸血鬼にも愛は必要？(仮)

2011年11月9日02時12分発行